

奥野他見男  
著

學士様なら  
娘をやるか

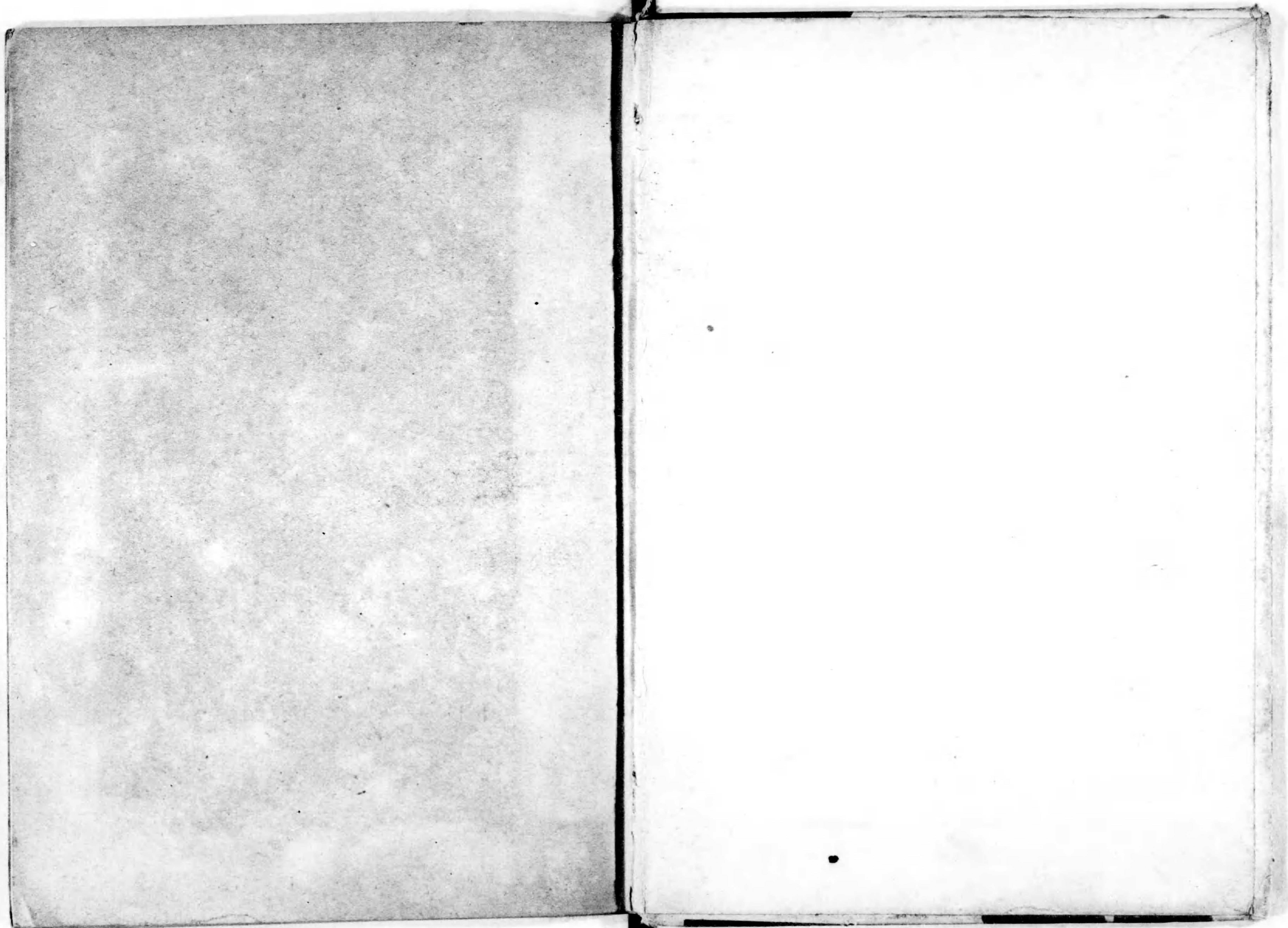


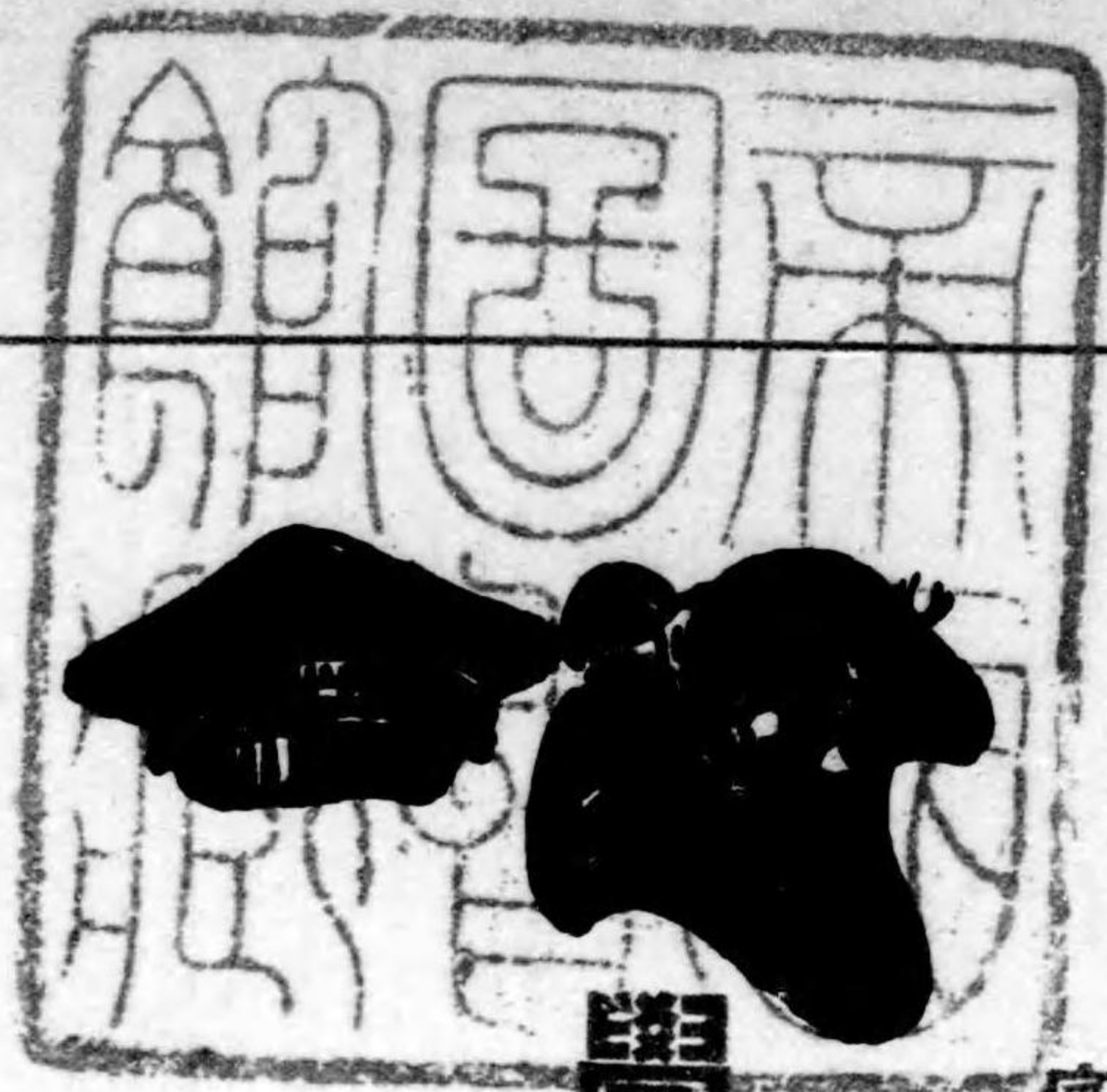
FMRI



始





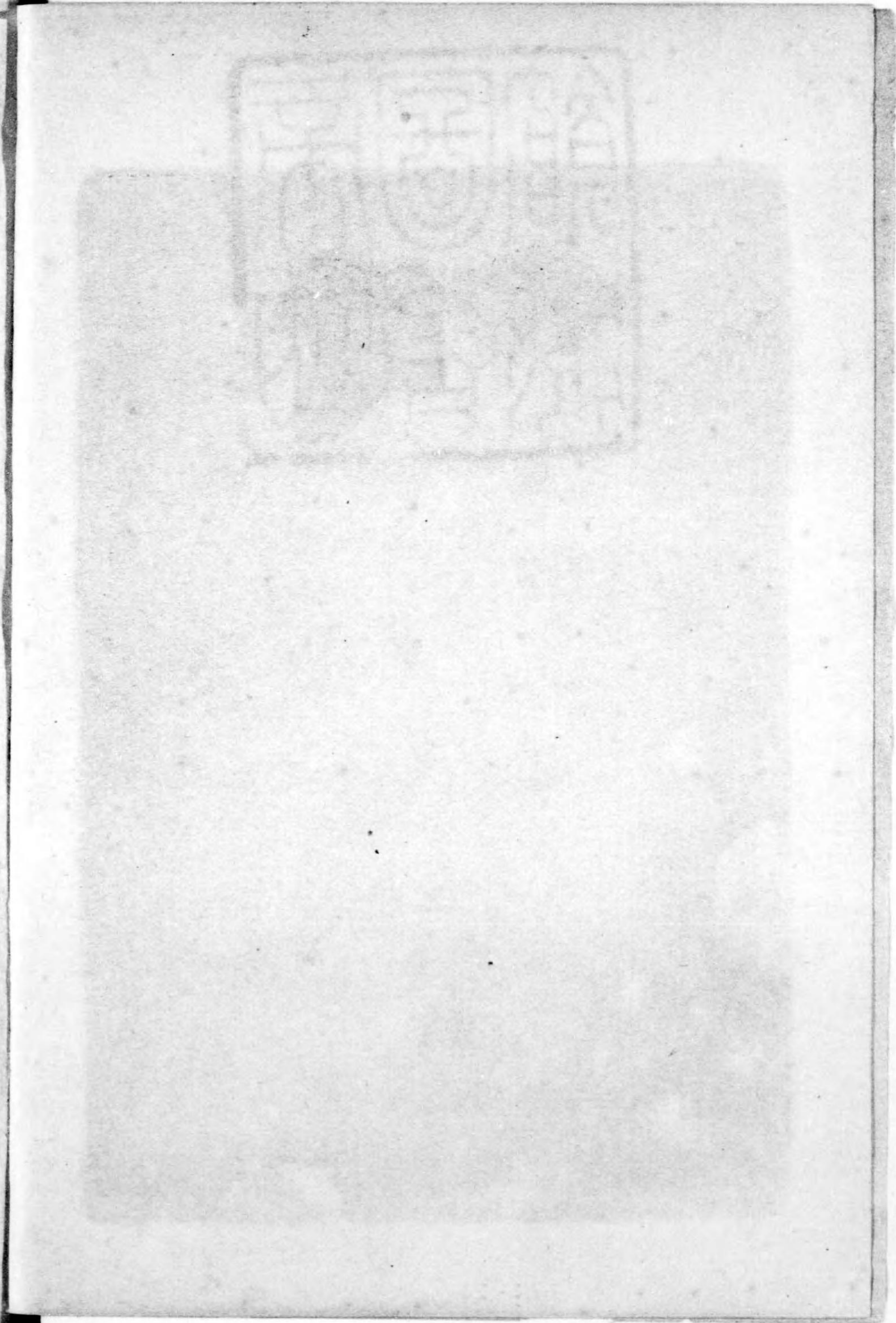
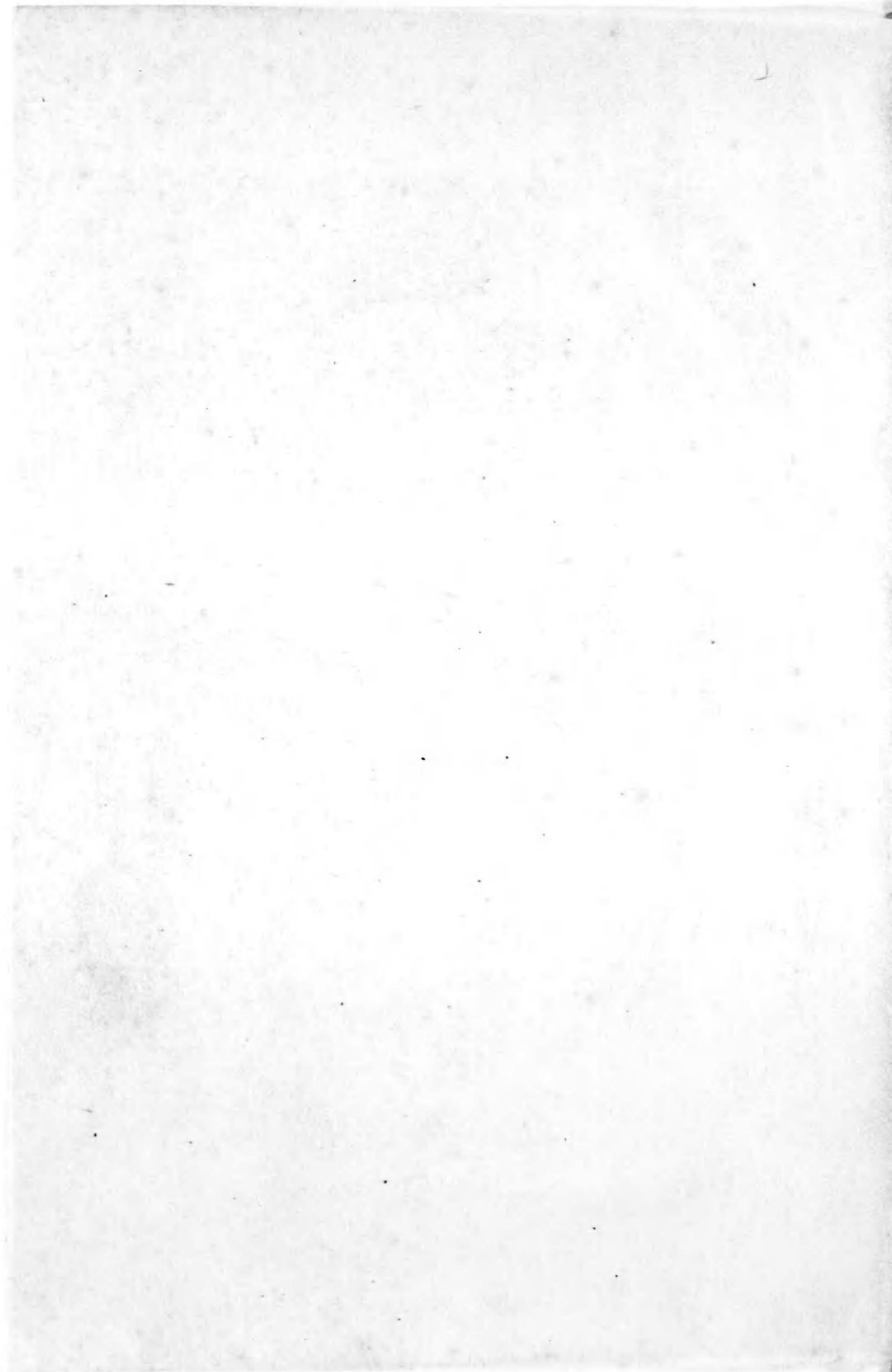


奥野他見男著

學士様なら  
娘をやる

大正  
9. 10. 30  
内交

畫并 著 氏 十 九 犬



特 101  
177

見合まで済ませて  
おいて今更逃げる  
とは、そりや聞え  
ませぬ學士様、



あゝ我が  
事止みんぬる哉  
だ、一緒に卒業し  
た連中の妻と  
比べると、  
僕のが一  
番悪い。  
あゝ學士であ  
りながら。



藝者を連れて箱根  
ゆき。  
ステーションで  
ビタリと舊師に  
出喰わす。  
「オイ、此方を見な  
いうちに隠れろ」  
「見たつて構はな  
いぢやないの、  
もう落第させる  
権利がないから  
大丈夫!!」



1

花  
婿  
驚  
愕  
記



吉野君は或日ヒヨツクリ己れを訪ねて来た、色々の話の末「君に強つての願ひごとがあるが、なんと聽いては呉れまいか」とのこと。ハテと己れは居住ひを正した。

「……？」

「外でもないが』

と彼れは暫らく云ひ難く相にしてゐたが、遂に思ひ切つて、「どこか養子の口が無いだらうか』とある。

「へ？君が養子に？養子に行かなくてもいい、ぢやないか』

と己れは先輩面して一寸排斥してやつた。男子須らく男と生れたら養子になんかと云ふ氣配を示した、そして更に語を繼いで、

「君もモウ來年は工學士だ 今更なんだい』

と、一寸侮蔑の色を浮べた、すると吉野は如何様御尤だと云ふ顔をした、ぢやモ一遍思ひ直して見ようかとも思ふたらしい、暫らく沈黙して如何にせばよきやと苦悶してゐたが、矢つ張り望の綱はないと諦きらめた風をして口ごもらして、

「實は或る事情で家から學資が續かなくなつたんだよ、己れの性として苦學するなご、云ふ根氣も出ない、出来るなら樂々と遊んでゐて卒業したいんだ、君は己れの性格をよく知つてるぢやないか、頼むよ、君に頼んでおいたら交際の廣い君だもの、ねえ君、え？」  
ときた。さう云はれて見ればさうかも知れぬと己れは忽に交際の廣

い顔付した。

『よしッ、己れに任せろ』

とドンと胸を叩いて見せた。己れは昔の幡隨院長兵衛の物事を引きうけた時には、此麼風に胸をドンと叩いて相手に絶大なる信頼を持たしたに違ひないと思ふたから、然う遣つて見たんだ。果して彼は之でホツと一息が出来ると思ふ風に、

『君さへ然う云つて呉れたら』とイソ／＼として歸つた。己れ見たいな瓢輕者でも他人に信頼されることがあるか知ら、どれ何麼顔してゐるか我れながら自分の顔を見たいと思つて、己れは立上がつて鏡を取上げ、そつと寫して見た。そして今云つた『よしッ己れに任

せろ』とドンと胸を叩く藝當を再び繰返して見て、思はず己れは獨言した。『へん確かな所がある!!』

己れはそれからと云ふものは、途中で友人先輩知己に逢ひさへすれば、

『養子を欲しい家はないか、ないか』と根掘り葉掘りした、彼等は一様に、

『さア、いづれ心あたりがあつたらさ。チと遊びに来たまへ、失敬』と片ツ端から尻ツ尾に帆をかけた。己れは幾度かウンザリしてあゝ人間媒酌たる可からずと手を引かうとしたが、その時に限つて悪魔サタンの様な大きな手が頭上にかゝつて、

『よしッ己れに任せろを何うするんだ』と囁く様に思はれたので詮方なくトボ〜と、

『養子は要りませんか、エー養子は』と足引きずり歩いた。

幸運途に來たる！遂々己れは大學の書記の禿頭を擱んだ。禿さんは私に心當りがあると天にも地にも代へ難い聲！己れは思はず頭からさす後光の有難さにひれ伏した。

禿さんの物語る所に依ると、禿さんの知己に一昨年△△女學校を卒業した娘がある、今年廿一、お身體の丈夫さと云つたら！それに自宅には財産がドツサリ、家族と云つたら父母と妹とその方の四人暮し、矢鱈に養子を探してゐましたよとある。

「ホー、ホー」と己れは大に乘氣がしたので漸次近づいた、彼が云ひ終るや否や己れは不審の一矢を忽ちヒューツと放つた。禿さんは肝心の御標緻の事に就いては一言も敷衍せぬ、忘れたのか知ら。

『結構ですナ、所で御標緻は？』

と己れは顔を上げた、所が禿さん急に頭を抱えて、

『身體は御丈夫ですよ』

『イヤ標緻は何うです？』

『そりや御丈夫な人で病氣になつたことは一度も』と禿さんは飽く迄も身體の丈夫に獅噛み附いてゐて放れない。そこで己れはハツキリと而かも嚴然たる眞顔に變つて、

「御丈夫は確かに判りました、御標緻の點は如何です？」  
 すると禿さん今は遁れる道はないと思ふたのか急に下を見たり上  
 を見たりしてゐたが、もう諦めたと云ふ風に、

「それがね、へ……………」

へ……………ちや判らない、聞き返さうと思ふてゐると「貴方は淺草  
 の山門へ被居つたことがありますか」と妙なことを聴く。

「ありますよ」と怪訊さうに己れは返した。

「あの山門の傍らに大きな仁王さんが二人ゐますね」

「え、あります」

「あの顔を何う思ひます？」

「そりや怖い顔ですなア、ゾツとします」

「お互さまで」

「え？」

「その娘の顔と云ふのはあの仁王さん酷似です、どんなモンでせう  
 ?」

アレ助けて——。

「顔には筋骨隆々と、眦は決し……………」

「ご、ご戯談ぢやない、ほ、本當ですか」

「私は嘘を申したことは一度も。その代り貴方、親には孝行で、氣  
 立は優しく、近所隣りの評判です、如何でせう貴方だつたらお氣に

入りますか」

「さア——」

「貰ふ氣になりませんか」

「さア——」

そんな嫁御と一緒にならブルブル、三度の飯も碌にお腹へ通るまい。それでも茲に話が幸ひ成功したと假定して、「コレ妻や」と呼んで見たとして鬼をも喰はんず大きな口から「アイヨ」オー恐わ己れが婿入りするんぢやあるまいし、一應は吉野君に「此處所があるが」と當つて見るのが正當な道だと思ふたので、己れは禿さんと別れた直ぐその足で吉野君を訪ねた、幸ひ彼は家に居つた。

『吉野喜べ、養子口はあつたよ』

と己れは突然浴せた。すると彼は「え？」と折角書いてゐたノートの整理もそこへ、グツと立ち上がったかと思ふと、突然己れの手を確つかり握つて、

「サンクキュー、そして其の家は？その娘は？」

吉野早まるな娘は仁王ぢや山門ぢや。然し己れは然うは云はぬ。徐ろに身體の丈夫さと云つたら全で上野の西郷さんの銅像見たいだ相な、それに金は藏に隠りを發してゐるんだせ、どうだと云つた。

「それはいゝね、有難う、本當に僕は君に衷心感謝する」

コレ、まだ早い。

「所ところが縹きりやう緞ぐらひが少々せうく落ちるんだと云いふがいか、その代かはり氣き立だてはそりや好いいんだとさ」

「なアに縹きりやう緞ぐらひ位ひ、心こころさへ宜よかつたら」

「君きみ本ほん當たうか」

「本ほん當たうだとも！」

「ちや萬ばん事じ己おれに任まかして後あとで苦く情じやうは無ないな」

「己おれは君きみを信しんずる！」

餘あまり信しんじて呉くれるな。

己おれは又また禿はげさんを訪たうねた。そして先まづ滔たう々くと懸けん河がの辯べんを振ふるつて吉よし野のと云いふ男をとこを推すい賛さんした。成せい績せきは學がく校かうで十じゅう何なん番ばんだし、それに運うん動どうは何

んでもござれ、ベースボールは以い前ぜんは選せん手しゅだし柔じゆう道どう劍けん術じゆつとして爲ならざるはない。若もしそれが嘘うそだと思おぼ召しめしたら何なに處どこからでも裏うら聞きしてごらうぢろと念ねんを入れ、最さい後ごに「どうです、貴あなた方も一ひと肌はだぬいで下くだすつては」と出でた。猶なほ又またその最さい後ごに「及およばずながら私わたしも副ふく媒はい酌しやく人にんの位ゐ置ちに立たつて責せき任にんを別わかちますから」と結むすんだ。すると此こゝの言ことば葉はに禿はげさん大おほび喜よろこんで「それなら私わたしも早さつ速そく先せん方ほうの意い志しをきいて」とあつた。禿はげも斯かう出でてくれると存ぞん外ぐわい話わせる男をとこだ。

翌よく日じつ己おれは首しゆ尾び如いか何かにと禿はげさんを又また訪たうねた、

「西にし川がはさんお喜よろこびなさい、先せん方ほうも大おほび乗のり氣きですぞ  
面おも白しろくなつて來きた哩わい。

「そして先方では男の方の寫眞を是非見たいと云つてましたから、お持ちでしたらどうか」

『して娘の方の寫眞は？』

すると禿さん急に聲を密めて、

『これは貴方と私との相談ですが、その娘の方の寫眞は見せない方が宜しくありませんか』

己れはウーと唸つて、

『然し吉野君が無理に見たいとあつたら、鴨越の難所ですナ』

『そこを旨く外すのが貴方の力ですよ』

『承知しました』

と己れは一寸悪者になつた、俯仰天地に少し恥ぢた。

吉野君の宅を訪ねると天の幸ひせるか彼は不在だつた。そこで己れは勝手に室中を探してどうく澤山發見した、その裡で殊によく寫つてゐるのを之に限るぞかすと押戴き、机の上でスラ／＼と寫眞持つて行く、西川』と一筆啓上し、忽ち一目散。吉野の不在であつたことは吉野の運の盡き、彼は「娘の寫眞は？」と尋ねる相手を通して了つた。

『どうです此の男振りは？』

と己れは三度び禿に接した。

『御立派な方ですなア、申分ありませんね、先方も之を見ては食指

動かすにゐられないでせう』

と首を縦に横に感服した。己れは吉野に猛烈な腋臭のあること等  
おくびにも出さなかつた。禿は宙を飛んで走つた、己れはその儘禿  
さんの家に待つてゐた。

禿よ、禿よ、疾くくかへれ。

その裡禿はガラリと戸をあけるが早い、

「西川さんく」と歡喜の聲を張りあげて『見合の段取り、見合の  
段取り』と雀躍り一しきり。漸くにして、

『明後日午後一時上野不忍亭で見合と決めて來ました、先方でも裏  
聞きするわ、寫真を見るわ、私の云ふた通りであつたので、娘の婿

にこれ以上はないと大喜び、此の婿遁して外に婿のある可きと、天  
に伏し地に謝し、この爺を救ひの神の様に正座へ据ゑて、御飯を出  
すやら酒を薦めるやら、親子諸共どうぞ宜しく願ひしますと拜ま  
れた時の嬉しさ！。西川さん、もう斯うなつたら理が非でも願ひ  
します何卒宜しく』

『願ひしますですか』

『そ、その通り！』

愈々見合の當日になつた、己れは吉野君を十二時半に訪ねた。

『もういゝか、出かけよう』



と外から聲をかける。

「ちよ、一寸待つてくれ」

「何してゐるんだ」

と云ひつゝ、入つて行くと座敷にゐない。

「どこだ？」

「此處だよ」

と云ふ聲を頼りに行つて見ると、庭の真中に真裸になつて桶に湯を汲んで一生懸命腋の下を擦つてゐた。己れの姿が眼につくと慌て、胸のあたりを擦つた。へん知らぬと思つてゐるな。腋臭になると飛んだ苦勞がいと見える。

彼は倉皇として止めた、身體を悉皆拭いて、いざ衣服を着る拍子に、腋の下の空気を密つと手で搦ふて鼻で嗅いだ。餘程氣になると見えたり。己れも今では他人事でもないから脊中を拭いてやるゝと云つて縁側へ下りながら、彼の後に廻はり、そつと腋の下を嗅いで心の中で「この位の香ひなら解るまい！」  
愈々連立つ。

『どんな氣持ちがする？』

「嬉しい様なソワ／＼する様な、愈々今日で己れの妻君も決するかと思ふと」

と彼は歡喜の眸を上げた。己れは故意と他のことらしく、女の美

しい者は屹度氣立が悪い、美しい美しくないと言つてるのは若いうちだ、女の氣立さへよけりや其麼幸福な事はないからねえと暗に網を張る。そして己れは彼に『よしんば世間に仁王みたいな顔の女があらうとも氣立さへ好かつたら己れなら貰ふ』と念入りに附け加へた。

不忍池畔に出て觀月橋を渡りかけると、彼は急に足がゴツ／＼して容易に進まない、きまりが悪いなア、氣極りが悪いなアと連發してゐる。

『なアに平氣さ、人生至る所青山ありぢやないか』

と勵ましても少つとも青山らしい顔をしなない、稍紅潮を呈しながら

ら聲まで微かに震ひを帯びてゐる、確かりせい、コラ!

二人は遂々不忍亭の玄關に御尊顔を並べた。見ると下駄が四足、一列横隊をなしてゐる。その裡の二足は女の下駄、而かもその一足は華かな紅緒だ。來てゐるぞ、來てゐるぞ。

障子越しに見付けたんだらう、禿さんが飛んで出て、

『さア、さア先刻からお待ちですから』と、ゑびす顔で迎へる、續いて女中が變な笑ひをして『よくこそ』。

チラツと、己れの眼に娘の母なる人の眼が一心不亂に灑がれてゐるのに氣が附いた。慌て、己れは吉野君の尻をツ、いて、其れとなぐ一舉一動注意しろと知らせる。禿さんを先きに次に吉野君、最後

に己れと云ふ順序で今しその室へ入らうとする刹那、己れは吉野君の羽織の襟が立つてゐるのを見出し、慌て、直してやる。そして極く小さい聲で『一寸顔見せる』と叫くと、ニツと振返つて見せる。

『さア此方へ』

と禿さんは既に整へてあつた二ツの座蒲團の上へ我等を導く。我等座る、最初己れが禿さんに依つて此の方が西川さんと紹介される。己れはその時途中で吉野君と『初めてお目にかゝります、私は』をお互に暗記してゐたのを晴れの場所として明瞭にやつて退ける。續いて吉野君も練習の功あつて先づは無難、いつもだつたら最先きに座蒲團の上に坐つて胡座かくんだけど、今日と云ふ今日は三度無理に

薦められ漸く四度目に坐る、その慇懃さ、とてもく大の字になつて『あゝ玉盃に』の面付ぢやない。

挨拶終つてから、己れは己れが見合するんぢや無いからと、平氣でズラリと見渡し、娘の前へ視線が来るに及んでピタリと止めた、アレー命ばかりは助けてくれ、あの醜さ、眼光炯々として怒れる虎のその如し、己れの身體はゾクツとした。之が若し己れが見合するんであつたら下駄を掴むが早いか雲を霞と逃げ失せるんだけど己れぢや無いと思ふとホツと一息。

禿さんは仲々機轉を利かしてゐる。斯う云ふ風の座席だ。

父 禿 僕  
娘 母 婿

吉野君と娘との間に母を入れて陣取らしてある、だから吉野君が娘を見むと欲せば視線の防物たる母を避けなくちやならん、避けるにはグツと反身になるか、又はスツと蹲まなくちやならん。其處事をするは如何にも男の權威に係はる。其處に顔が見たいのか、なんと云ふ下品な人だらうと思はれる憂ひがある。逢ひたい見たいは山々であつても、其れは出來ぬ、若しそれを強いて斷行しやうものなら、此の男め女の顔を見ることのみ焦つてゐる、將來有望でない、斜めに坐つてゐる父ちや人から睨まれたら、折角寶の山に入りながら、空しく素手で歸らなくちやならん。此の縁談が破れたら學資の道がないと一途に思つてゐる吉野は唯戰々競々、反身、伏身な

ど、は思ひも寄らぬ。試みに眸を放つて彼を見れば、恰も啞の如く黙々としてゐるのみならず野道で見付けた地藏さんの様に堅くなつてゐる。ベースボールの選手も駄目だナ。

娘如何にと眺むれば、コはそも如何にコは如何に、キリストの前に『主よ我が罪を許したまへ』を祈つてゐるが如く深くうなだれてゐる。臆ては首を擡げるだらうと期待してゐたが、待てど暮せどビクともせず、本當に永いお祈り續きなのでウンザリして己れは眸を舊に復した。

『結構なお天氣で』

『さうですナ』

「此の夏には何處に旅行なさいましたか」

「どこへも」

「今年も山で人が死にましたナ」

「可哀想でしたね」

此麼會話が親父さんと己れとの間にあつた許りで、あとは森としてゐる。殆んど十五分間、もう宜からうと己れは禿さんの股をツ、いて相圖した。

「では僕等は之れで」

と己れは身體の重心を動かした、そして「ねえ君」と云ひつゝ、吉野君を顧みた。

先方の挨拶は僕に對しては「どうぞ宜しく!!」

吉野君に對しては「御縁があつたら!!」

いざ立上がつて室外へ出ようとする、二人とも足の痺れが一時に發して歩けない。

「ムー」と己れはうめいた、そして倒れかゝる様に柱に獅噛み付いた。吉野君は嘗て正しく座つたことが無い男だ、彼は此の場合強ひて平氣を装ふて歩かうとした。

俄然ヨロ／＼とよろめいたかと思ふと、パタリ倒れた。己れの様に柱に獅噛み附いた方が何麼に智恵があるかも知れない。

二人は苦い笑ひを交換した、そしてお互に「慣れないものですか

ら、慣れないものですから』と一人は柱から、一人は壘にへたばつて口々に辯解した。

「お若い方は皆様さうですよ」

と母なる人は仕様事なしに斯う云つた。禿さんは最後の一秒に拙い事をして呉れたナと云ふ顔をして、挨拶に窮してへッへッへッと妙な笑ひをした。己れは侮辱の籠つたへッへッだナと屹とした。と同時に血の循環が足の筋肉へも福音を傳へてきた、二人はケロリとして、そして頭搔き／＼悪い事でもして逃げ出す様に外へ飛び出した。

「仕舞つた、ほんとに仕舞つた。あゝ云ふ體たらくを見られては、

此の縁談は駄目かも知れないね」

と吉野君は切りに學資のつるがオヂヤンになりやしないかと氣をもみ出した。

「大丈夫だよ、其廢事で破談する様な家庭だつたら、碌な家庭ぢやないよ、大丈夫さ」

と己れは無理に大きな慰安を與へた。けれども内心「若しや」と己れも人知れず心痛した。が、急に話を外らして、

「顔を見たかい？」

「いや」

「見合の席上で配遇者の顔を見ないと云ふことがあるもんか」

ど、己れはあれぢやお互に見る事は出来なかつたらうと思ひつゝ、故意と強く出た。

「だつて見られ無かつたから仕方がない」

「ぢや何うするんだ」

「君は見て呉れたらう」

「そりや己れは見たよ」

「どうだつた？」

「柔和な相だつたよ、ブツ」

「己れは思はず噴き出した。」

「何が可笑しいんだ」

と彼は不審相に尋ねた。失策つたと己れはハツとしたが突嗟に、  
「見合の席上で娘の顔を見ないなんて、アツハツハ」と巧みに紛ら  
した。彼は仕様事なしにお附き合ひ笑ひを洩らした。

「どうする？入婿か？」

「まてよ」

「君の勝手次第だ、是か非か、きつぱり云つてくれ」

彼と僕とは黙つて歩いた。

「よしッ入婿く！存亡の場合に熟慮なし！」と高く彼は叫んだ、到  
頭仁王さんのお婿さんか。

吉野君は己れの家に暫らく遊んでゐた、歸ると入換はりに禿さん

が来た。心配相に「吉野さんは何う云つてました、先方では無論兩手を出して待つてます」と傳へた。

「吉野君も決めました!」

「え? 不服がありませんでしたか」

「どうして」

「ハテ、縁談とは不可思議なものですなア!!」

今日は結婚式である。

己れは副媒酌と云ふ格で吉野君を始めとして、其の一族親戚の者と一緒、六時半までに向ふへ到着の手筈になつてゐる。己れは久々で紋付羽織に仙臺平の袴と洒落れた。幾程いゝ年齢をしてゐても

斯うしてフンばつて見ると嬉しさがこみあげてくる。ある奥様の云分ぢやないが「貴方の其のお顔で、着せるものを着せたら誰れの眼から見ても貴公子と睨みますよ」の言葉が今日は當て簾るだらう、千代尼に此の姿を見せたら屹度「縦に見つ横に見つきめよき殿御かな」と吟じて呉れるだらうと、ニンヤリ勇んで吉野君の宅へ出かけて見ると、一族皆揃つてゐるに係はらず肝心の吉野君がゐない。結婚當日花婿行衛不明とはきこゑませぬ、聽いて見ると野球仕合を見物に行つたと云ふ。ひどい男もあるものだと言つて愛憎を盡かしてゐる所へ漸々歸つて来た。時計を見ると出發時刻に十五分しかない。コ、ナ不屈者めがツと叱り付け、それ大急ぎで風呂へ行つて男を磨いて



来いと、箒で尻尾を叩いて最大急行を命ずる。歸つて来る所をそれ  
 帶よ袴よと總掛りの大手敷、もう話が確定したとあるもんだからヒ  
 ドク呑氣に納まつてゐる。

一同は車に乗つた。

「オイ西川君」

と吉野君は後から聲をかける。

「ウン」と己れは振りむいた。

「君、此の扇は孰方の手に持つのか知つてゐるかい？」

「知らないよ」

「心細い返事だなア——」

と彼が慨歎する矢先、吉野君の車夫が、

「それは旦那左手に持つてゐて、御辭儀する時に斯う云ふ風にして」  
 と車夫さん片手で車ひきながら教へて走る、

振り向いて見ると吉野君一生懸命車上で御稽古の真最中!!

最早二町で仁王さんの家だと云ふ曲角に禿さんが立つて待つてゐ  
 た。一行を見ると卅年間別れてゐた親子相見たと云ふ様な嬉しい表  
 情をして『御案内を』と云ひながら小走りに駈けて行く、車は従つ  
 た。

家の前には眞黒な人だ、己れと吉野君とが下りると、孰方が花婿  
 だらうとキヨロくしてゐた、その裡にブーツと家の中へすひ込ま

れる様に入つた。すると家の子郎黨共ハ、ツとばかりひれ伏してゐる、その中を我等横柄に案内された一室に通つた。吉野君はベースボールなんか見たことが無いと云ふ神妙な顔付して座つた。

芳潤なお茶が出る、軽なお煎餅が出る、吉野君は之れは有難いとばかりその煎餅を大口あけてメリ／＼と音させて頬張る。見るに見かねて母親が「しッ」と制した。彼は慌て、口元を拭つて仙臺萩の鶴千代の様に憾めし相に母親の顔を見守つた。

「では何卒」と禿さんは一同を導いた。己れは最先きになつて行かうとすると「貴方は私と一緒に一層下座ですから」と禿さんは思はず己れの顔の赤らむ様な音聲で叫いた。己れは「この禿め」と心の

中に怒鳴つて漸つと腹の虫を慰める。

見ると向ふ側一列に渡つて家族親戚一同ズラリ！吉野黨は此方へズラリ！皆なは眩しい互の眼光を避けるためにウツ伏してゐた。沈黙暫し、禿さんは両方から見える所に位置をしめて、オホン／＼咽の流通をはかりながら、

「エー今度はエー御兩家の縁談が首尾よく纏まりました、エー此の私風情がエー媒酌となりましたことはエー洵にエー光榮で御座いますしてエー。就いては御紹介しまするがエー一番端の方は御當家の御主人で次はエー……………」

とエーの連發、その發音が如何にも奇妙なエーであつたので、己

れはもう少しで噴き出さうとしたが、

「此の方が西川さんで」と己れの紹介の番が何時しか廻はつてゐたので、急に改まつてハツと懇ろに首を下げた。

總ての紹介が済むと同時に、一同の視線は始めて互に交換された。

己れは黙つて吉野君と嫁女の視線にのみ注意した。

彼の驚き！彼の失望！彼の苦悶！！

彼女の喜び！彼女の歡喜！彼女の驚愕！！

一は顔を蓋ひ一は顔を赤らめた。一はア、君としたら此麼仁王面をど此の己れを睨め、一はア、貴方は生佛さまだと云ふ様に禿さんの顔を尊めた。その對照の妙！！

その空氣は次第に擴がり、廳で相對する一門の悲哀、一門の歡喜と變つた、然し廳であゝ云ふ娘と定つたのも運命と諦める様子がアリ／＼と吉野黨一同の眉宇に仄めいた。

山の如き馳走、泉の如き酒、吉野黨は妬げ半分に、嫁御黨はこみ上げる喜びに、兩黨は共々にグン／＼酔ふた。

酔ひが廻はるに連れ、悲哀黨變じて歡喜黨となり、歡喜黨は愈々歡喜に。その裡、誰れの口からとも無く「高砂や——」と出た。「此の浦風に帆を上げてエ——」と一整に和した。

吉野君は最早いくら腕いたつて、斯うなつてはと觀念の眼を閉ぢた。廳で細くあけて花嫁仁王さんを見た、仁王さんの眼は相變らず

結  
婚  
式  
へ

炯々としてゐる。  
新養子吉野は心の中で斯う叫んだ『あゝ金の爲めだ!!』

筑紫欣一君は尋常科より大學を卒業する迄非常な成績優等で一貫した珍らしい男、家は東京で指折り數へられる屈指の名望家で父なる人は本職は醫學の泰斗、而かも傍ら議員何々會長と名刺の一面黒々の肩書ある御仁。とかく家が富豪であると、碌な息子はゐない者だが此の欣一君は碌な所か却つて親父を凌駕する明敏なる頭腦と品行方正を具有して居つた。だから在學中早くも高文には驚くべき優等を以つて合格してゐる。それに男振りにはよしと云ふので縁談山の如く一時に降つて來た。此の家の名望と此の秀才だから堪らない、悉皆上流階級の我れと思はむものゝ寫眞が悉く集まつた。

此奴は團子鼻だから不可ない、此女は口が鶴の様に尖がつてゐる

43

から駄目だ、此女は眼玉が金魚の様に飛び出てるから駄ばかり喰はすから止めにせい。此女は顔がいゝけど足が短かい様だから面白くねえ、此女は髪が朝漬けの様に縮んでゐるからペケだ、此女は顎の面積が富士の裾野の様に長いから飽きらめろと片ツ端から粉微塵、その裡から容色及びスタイルの點に於て一點の非難なき五枚の寫眞を撰り出した、その中から更に本人の操行を調べ、虚榮心の強い女とあつて刎ね付けたのが二枚、残りの三枚で吟味に吟味を重ね、選びに選んだのが竹澤淳一氏次女美枝子嬢である、近所で本人のことを尋ねれば良順と賞めるし、又學校での成績其他を調べれば稀れに見るの才媛で模範生で特別待遇を受けてゐたと云ふ、更に家柄を

探ぐると之れ又聊かの難がない、加ふるに媒酌人は名代の位置の人物、話は立所に定まつて了つた、思へば約半ヶ年間彼女にしやうか此女にしやうかと悶へてゐた彼の胸も之で悉皆四海波穩かと相成つて了つた。

兎角好い男は醜い女を、美しい女は醜面の男と夫婦になると世間の法則で定まつてゐるものだから彼れの友人共たる我々『なアに選び優つてゐて碌なのが来るものか、彼は男が好いから碌なのが貰へやしないよ』と噂し合つてゐたのが見事に外づれて、この才色兼備を又も捷ち得たのに、チエツと舌鼓打ちながら、

『欣一はどの道かけても秀才だ哩！』

結納だけ交換して欣一君は一年志願兵に入營した、結婚は除隊早々どあつた。お互ひの心を融和させる爲めか、よく互の性質を知り合ふ爲めか、それとも未來の良人未來の妻は互に逢ひたさ見たさに堪えられぬからであつたのかそれは存せぬ、日曜日度には美枝子嬢には欣一君の宅を訪づれ遊ばした。

その頃の欣一君のみじめさ、ボロ／＼の兵隊靴に星一ツ、日頃の氣色も日頃の瀟洒もあるものかは、眞黒な顔して髯ぼう／＼にして變てこな歩き振りの所謂遺憾なく兵隊さんを發輝したものであつたそして豆餅頬張つて空腹を満たし、眼ばかり白く光らせてゐたものであつた。己れが花嫁なら此麼淺ましい姿を見たら、一遍で『誰れ

「此麼男に」と下駄持つて逃げ出すのだが、流石は美枝子さん「わらは更にいとひまじく候」とばかり汗臭い服にも頓着なしに、優しき温愛の情に微塵も狂ひがない。流石は選ばれた程あつて違ふ哩。僕は或る日曜、偶然欣一君を訪問すると、今來合はしてゐるから未來さんに紹介すると云ひ出した、音に聴く欣一君の愛妻となる可き女は何麼娘かと好奇心で胸一杯に成つてゐたから敵打の時の様に眼色を變へて待ち構へてゐた。

そこへスウ〜と柔かい音がした、己れは來たなツと思ふたら、急に恥かしさを覺えた、そして覺えず先刻から張り詰めた眸を疊へ落して了つた。此麼氣弱いことでは批評が出來ぬぞと自らを鞭つん

だけど何うしても眼が擡がらうとしなかつた。その時己れはフイと貴方は羞恥むと可愛い、のねと云つて呉れた或る奥様の言葉を思出し、一層斯うしてゐた方が欣一君の友人も亦捨てた者でないと思はれるかも知れぬ、云はゞ友人を總代する大事の場合だ、己は胡座を急遽正座に繕ふて端然たる容姿を示して意義ある友人を形作つた。

「僕の……です」

と欣一君は己れに云ふた、僕の何と云ふたんだらう、軍人が言語不明瞭ちウことがあツか。

「あッ然うですか、奥様ですか、私は」  
「オイ〜まだ奥様ぢやないんだよ」

「ちや君は僕の………ですと云ふた中の文句は何んだつたい？」  
 『己れも解らない』と旨く遁げる。

「何んでもいゝ哩、イヤこれは一寸ヒドい、誰方でも宜しい、チと張合がないなア、名無しの權兵衛どつこいお嬢さん私は西川と云ひます何卒宜しく』

と挨拶しつゝハタツと見詰めた。

お凸でないか、團子鼻でないか、口があるか無いか、容姿は如何に行儀は如何に。僕は無作法者に見せかけて微細な點まで注意するんだぞ。

ウムと己れは思はず頷づいた。

「イヤ、見事だ哩、オイ欣、貴様にや過ぎものだぞ、素敵な掘出物だ』

『小判ちやあるまいし』

『ちや名前を云へ』

『美枝さん云つても宜しいでせうか』

と云ひつゝフと氣が付き、

『あッ、もう云つて了つた！』

と頭搔きく、

『美枝てんだ』

は遅いぞ、遅いぞ。



美枝さんは氣極惡げに嬉し相に、スツと立つてお茶を入れに行く。  
 『止まれッ、オイ、』

「……………」

と思はず立止まつて振向く。

『ねえ欣一君、振ひ付きたい程の後姿ぢやないか、天下第一品だね。  
 モよかつた……………前エーオイ』

『あら』

と、吃驚して美枝さん思はず袖で顔隠して逃げる様にして行つて了ふ。

『しほらしい所があるだらう？』

と欣一君。

『ウム』

『あすこが良いんだよ、そして君も矢つ張り美人と思ふかい？』

『ウム』

『美しいと思はないかい？』

『思ふ』

『モ少し張合のある返事してくれ、君の眼に何う映じた？』

『深山の白百合と見た』

『それから？』

『谷間の姫百合と見た』

「それから？」

「山寨の猿と見た」

「コラッ」

○

肅啓、時下増寒之候御清穆被爲渡慶賀至極に奉存候借思息  
欣一儀一昨年東京帝國大學法科大學卒業後一年志願兵役に  
服し居候處今回勤務を終へ歸宅仕候就いては豫て森田吉次  
郎殿御夫婦の御媒妁に依り縁談相整ひ居候竹澤淳一次女美  
枝子と結婚致候に付御披露の爲粗酒一獻差上申度候間歳末  
御多用之際誠に恐入候得共來る十四日午後四時上野精養軒  
へ御貴臨之榮を賜はり候へば難有仕合に奉存候先は右御案

内迄謹で得貴意候 勿々敬具

筑紫一郎

同のぶ

大正△年△月△日

西川他見男殿

追白、御手數の段誠に恐縮に御座候得共諾否御一報を賜  
はり度願上候不備

己れは此の招待状を受けて思はずニヤリ微笑せざるを得なかつ  
た。そして直ちに花婿欣一君の所へ駆け付けた。

「愈々だね」

「ウム」

「嬉しいかい？」

「そりや……」と、近頃以つて益々眉目秀麗だ。

「己れは贈物をするよ、何がいゝ？」

「オヤ本當かい？」

「當り前さ」

「君みたいな瘦世帯に濟まないなア——」

「馬鹿ツ、何がいゝ？」

「ぢや駱駝のシャツをくれ」

「駱駝のシャツ？其麼シャツがあるかい」

「初耳だらう」

「高價いかい？」

「高價いとも！だから止せ」

「いや買ふ、恩に着せておくんだ」とへらす口、然し實際の話が、生じつかの物を頭痛めて考へ込むよりも豫め何がいと本人の意志を聽いてその望むものを贈るのが一番いゝんだとさ、だから己れは少しも苦心する事なしに然かも本人の最も希望する物を選ぶ事が出来た。天下之に如く名案がない。この問題はもう決定して了つた。

「君、フロックを持つてゐるのかい？」

「欣一君他人事ながら心配してくれろ。」

「フロック！實はまだ拵へてないんだよ」

「何うする？」

「へん憚りながら、丸山君からチャンと拜借の約束が出来てゐるんだ」と己れは天に嘯いた。

僕は此の婚儀を豫期してゐたので早くも己れと殆んど同體格の丸山君にフロツク拜借を歎願且つ哀願した。丸山君は何時でも取りに來いと快諾、そして此の間も結婚式に參列する男に貸して遣つたら濟んでから早速菓子折添へて持つて來たから君もその積りでと云ひ添へた。己れはその瞬間一寸苦い唾を呑んだ。友達甲斐の無いことを云ふナと顔の筋肉をビリ、ツツとして見せた。そしたら奴さん慌て、「戲、戲談だよ」と立所に諦らめ顔した。己れも立所に機嫌を取り直して「持つ可き者は親友ぢやなアー」と云ふ莫大な賛辭を

呈した、すると丸山君苦い唾を呑んで「穢しちや不可ないよ。」

翌日己れは直ちに銀座で駱駝をひやかした。存外安價かつた、然し僕は「之は存外高價かつたよ」と書き添へて欣一君に贈つた。欣一君から早速「君風情に此の大枚を費やさせてはと思はず涙がポト／＼した、洵に富者の萬燈よりも貧者の此の一燈は僕にとつては何麼に嬉しく思ふかも知れない、夢々忘れぬぞよ」と認めた手紙を受取つた。僕は彼品は見切り品で、然かも法外に値切つて買つた物だなど、腰にも出すもンぢや無いと思つた。

儲愈々當日に成つた、日本一の上野精養軒の門を潜るのは忝けなくも生れて初めてなんだい。抑々音に聞くばかりで、外から睨んで

一度彼處の御客様に成りて一なアと不忍池畔を散歩する度に幾度遣る瀬なき想ひをしたかも知れぬ。彼處の客になつたら己れは夫れでもう此の世に名残りがないと迄命懸けに思ひをかけて戀々の情轉に禁じ得なかつたのが、遂ひに好機到來、今日と云ふ今日こそは、フンゾリ返へる資格を立派に有する身分に成つたんだぞ。

漸つと五日前に頭を刈つただけど、外ならぬ精養軒とあるに氣位もそれに應じて大きくなり、妻の澁面作るのも構はず『そこ放せ』と振り切つて散髪屋に駆け込み旨く頭の禿を隠して貰ひ、飛ぶが如くに我が家指して『キリストは甦へり給へり』を連呼して駆け戻りながら、妻を捉へて縁側へ引つ張り出し『どうだ禿は見付かるまい!』

精養軒と云ふ音調は更に僕をして湯屋へ走る可く命じた。擦るわ磨くわ、磨くわ擦るわ、皮はみる／＼眞赤に、何糞ツもつとだ、もつとだ、垢と云ふ垢は塵も残さじ、あツイタ、なに痛くない／＼、今日のみ理が非でも我慢しろ、『へん精養軒のお客だよ!』

湯屋から歸るや忽ちヒラリと身をかはして電車に飛乗り、丸山君の居宅へ馳せ参じ約束のフロックを貸せと居据り談判するまでも無く、豫ねて用意してあつた風呂敷包みを奪ふが如くに再び我が家指してチリン、チリン、チリン。ほつと一息して『もう之で客の型が揃つた!』と先づは安堵の敷島フカーリ、フカーリ。

夫れから己れは精神の沈着を計つた、先づ岡田式静坐法を試みた

が、今日に限つて何うも旨く無我の境に到達せぬ、何んだかソワソワして仕方がない、まだ時間が充分にあるぢやないか、慌てぢや不可んと克己心を出して鎮静を企て、も何うしても駄目、魂まで精養軒と聽いてコン畜生ツ雀躍りしてゐやがるナ。

「貴方、一遍此の服を着て見たら何う？」

と、妻は云ひ出した。

「なアに大丈夫さ、丸山君と僕は身丈けも肥え方も殆んど洋の東西を問はず均等だから」

「だつて念の爲よ、若やの事があつたら何うするの？」

「それも然うだが、お前は何事に對しても念を入れ過ぎる癖があつ

て不可ない」

と一寸叱り付けたが、何んだか氣に掛る様に思はれてならぬ。で妻の傍にゐては妻の今の言葉に屈した譏りがあるからと素知らぬ顔で剛情を通し、階下へ下り行くや否や密つと風呂敷包を手許へ引き寄せ、先づ絡みを解きつゝ「チャンと此の通りあるんだよ、之れを妻が……」と一々點検してゐた僕は思はず訝つと叫んだ。

「ヤツ、無いぞ、黒のネクタイが無い！」

とペコーンと魂を宙返りさせた。再び檢めた、無い！

ガバツと己れは身體を刎ね起しさま、机にある時計を手取るが早いかグワツと眼を据ゑた、正二時！

「あと二時間しかない、丸山君の氣利かすめ、あゝ」と唸きながら、

「オイ妻ッ」

と火魂しく呼び、

「ネクタイが無い！どうしよう〜」

「それ御覽、だからあたしが先刻……」

「小言はあとで……何うする〜」と地駄太踏むと、

「子供が眼を覚ましますよ」

「え、ッ、買はうか」

「惜しいぢやないの！」

「あ、あ、胸が裂ける、ウーム、ウーム」

「愚圖々々してないで丸山さんの許へ行つて被居いな」

「よしッ」

と中折摺むで飛出ると、妻の奴「あなた——」と金切聲を上げる

ので「ナ、ナンだ？」

「電車切符を忘れちゃ不可ませんよ、さア〜」

丸山君の所まで電車は小一時間もかゝつた。早い時が四十五分それから歩く、應對する、出して来るまで待つ、御禮を云ふ、戻る道程、それ等の時間を計上して見ると四時にカツ〜ものだ、神よ願くば幸を賜へ〜。

生憎丸山君は不在だつた。出て來た下女を全て我が家の女中の如く叱り飛ばし、漸つと手に入れて汗タラ〜一目散に歸つて來て時計を見ると未だ廿分ある。アツ苦しかつたと坐り込む間もなく、泉の如く湧く汗を拭き拭き急いで着服。あゝ誠に艱難汝を玉にすとは至言なる哉、此の好紳士振り、二里の道を黒ネクタイ一ツの爲めに飛脚の様に駆け付けたさまは微塵も浮ばず。

妻も此の貴公子ぶつた風采が餘ッ程氣に入つたのか、スヤ〜就寢んで居る赤ちやんを抱き起しながら、無理に振り起して眼を覺まさし、

『ごらんよ、ごらんよ、嬢やのお父さんは此處に立派だよ』とまで

は宜かつたが、

「だけど嬢や、これは皆借物だよ！」でギヤフーン。

「ごうだ、缺點が無い？」

「立派だわ、何日も斯うだつたらあたし一緒に散歩して上げてもらわ〜」

「赤ンペー、今日こそは朝野の貴賓だよ、失敬ッ、ステツキは？」

「彼歴薪木みたいな杖を持つて行くよか、ステツキを忘れた様な顔して、両手をポケットに差込んで行つたら何う？」

「お前は利口だな、才氣煥發の女だな、そして……………」

「貴方、遅くなりますよ」



「オツと愚圖々々しちや居られねえ」と外へ足を踏む一步二歩三歩。  
 「貴方、貴方」

「なんだ？」

「帽子が阿彌陀に成つてますよ」

「よしッ」と早くも訂正して三步、四歩。

「貴方、貴方、貴方ッてば」

「又かい、執念い！何んだ？」と、振返つた。

「そのフロックは借物だから大事になさらくちや不可ませんよ」  
 僕はハツと四邊を見廻はし、臭い物に蓋をするが如くに彼女の口  
 を壓へ付けて、「しッ、近所へ聽えるぢやないか!!」

山高帽の而かもフロックであられもない、己れは小さく成つて電  
 車の一隅に蹲んだ。だつて然うだらう、そりや自働車に乗つてもい  
 っさ、俥に乗つても宜しい。だつて誰れも認めて呉れないぢや無い  
 か、己れが自働車を飛ばしたと云つても信用する者ッて一人もあり  
 やしない。又實際自働車を飛ばして駈け付けたとしても彼奴等は何  
 う思ふ、内心「なんだ身分不相應な、明日から喰へるか」と餘計な  
 心配までする憂ひがある。それよりか鳥なき里の蝙蝠、セビロや半  
 纏の兄さん連の中にフンゾリ返へつて之れ見よがしに振舞つた方が  
 什麼に肩身が廣いか知れないと云ふ抱負で、己れは電車に乗つた。  
 乗つてから己れは乗客の眼が「なんだフロックを着てゐやがつて

電車に乗るなんて客ッたれたナ」と嘲ける様に見えた、斯るが故に隅ッこに丸く小さく且つ縮んだ。精養軒の客も斯うなると悲惨な者。電車から下りて己れはスタコラ急ぎつゝ我れや果して純紳士に見えるか何うか怪しんだが、「旦那俵は如何？」と群がる車夫の包圍攻撃を受けたので思はず莞爾、「天は我れを欺かず、めめたぞ、めめたぞ。」

兎に角有名な此の兩家の結婚式とて車は走る、自働車は飛ぶ、上野公園を歩いてゐて屢々「危ないッ」と嘸鳴られて己れは右往左往に逃げ惑ひながら、「チエツ己れと同格の癖に!!」

前を見渡し後を振返へり、己れは急に淋しく悲しくなつて来た。

眼の届く限り、精養軒へ志ざす者で歩いて行く者来る者一人もゐない、なんと心細いことで夫れがあることよ、糞ッ巴れだつて車に乗つて見せるぞツ!? イヤ待てモ半町しか無いぢやないか、この風體で値切りも叶はず、高い賃金を吹ツかけられて妻子を路頭に迷はしめるな。眼は閉ぢて車を見まい、耳は蔽うてブウウを聴くまい、そして隅ッこの暗やみから小さく分らぬ様にして歩かう。我れをして我れを慰めしめよ「これでも精養軒の御客様だぞ!!」

己れは今精養軒の前の木蔭に身を隠した、そして密つと様子を窺つた。見よ門前には客の来る遅しとアレ〜彼麼に澤山待ち構へてゐるでは無いか。そして幾十の俵幾臺の自働車は兵隊さんの如く正

しく行列して先着の客の敷を示してゐる、而かも後から後へと護謨輪の軋る音自働車の轟。

此の己の淺ましき!! 恥かしさに胸の波動がドキン〜と高鳴りを覺えた、なんと云ふ威勢の無さであらう、なんと云ふ憐れなフロツクさんであらう。何うしても此の足がヌツと思ひ切り前へ進まないのか知ら。

彼處に出迎への者達の眼が此方に向かない旨い方法が無いものか知ら、その隙に己は飛び出て、さも〜俥に乗つた顔付で咄嗟に入り込むんだに。誰れか中で火鉢を顛覆かへして呉れ、ばい、それしたらあれよ〜と彼等の眼玉は其の方を注視するんだに。その油

斷が無くちや兎ても〜、あゝ兎ても〜。

己れは何か天變があつたらと何時迄もチツと蹲んでゐたが、それは無駄であつた。時間はズン〜進行する、もう人の往來も稀らだ、若し遅くれたらあの山と盛られた馳走も此の咽喉へ通るまいと、己れはグイと唾を呑んで悶えた。この悶えの磁石に引き付けられたのか、己れは我れ知らずフラ〜と足が前へノメリ出た。但し顔色は飽く迄も悲觀の絶頂に達して憾めしげに威勢のいゝ客を乗せて來た俥夫共を睨め付けながら。

己れは消え入る様な步調と顔色で遂に出迎人に對さねばなら無かつた、己れはもう藤村操の如く「吾人は須らく超越せざる可からず」

と諦きらめて了つた。

出迎人は此の蒼白の紳士を大臣に對するが如き鄭重を以つて迎へて呉れたので己れは益々恥入つた。その代り車に乗れぬ様な身分の男だといふ事を示す爲めに地に觸れむ許りに首を垂れて敬意を表した。妻は此の悄げた良人の様を見たら、立所に離縁を申出るだらうとフイと頭に浮んだ。

「どうぞ此方へ」と導かれる迄もなく、己れはトン／＼石段を登つた。然うして何うすればいゝのかモジ／＼した。其處へボーイが飛んで來た。己れの山高とオーバーを引繰る様にと取つて札を渡して呉れた。ハ、ーン之はオーバーの下足札だナ。

己れは其處に新たに己れに御辭儀してゐる人々を發見した。その人等の前に四角の盆があつた。其の盆の中には埋高く名刺が入つてゐたので、己れにも茲で名刺を渡せと云ふんだナと思つて、慌て、ポケットを探ぐつた。そして鉛筆缺の中から名刺を引張り出した。出る名刺も出る名刺も他人から貰つた名刺ばかりだつた。人々は今か今かと思詰めてゐたが、焦れば焦る程他人のばかり。己れは泣き出す様な顔をして二三步退ぞいて後向きになり、漸つと自分のを見出しヤレ／＼と思ふと、この時始めて他人の名刺は、以後片ツ端から破り捨てるに限ると思つた。

名刺を無事に渡してポカンとする餘裕もあらせず「彼方へ」と己

れは指示された。其處でズン／＼歩いて夫れ等の人々の周圍から全く離れて了ふや否や「さア來い」と急にフンゾリ返へつた。何故ならば今彼處に居た連中は情けない哉己れが車に乗つて來たか否かを知つてゐる、始めて上京した田舎者の様にマゴついた事も知つてゐる。然しこれからはもうこれ等の周圍と全く關係がない、車で來たか自働車で來たか、それを知つてゐるものが此の奥には一人も居ないんだぞ。殊に己れの勿氣の幸ひなのは彼の人々の中には己れの知つた顔の一つも無かつたことだ、だから誰れも噂の仕樣がないのだ。憚りながらピヨン／＼ながら斯うなつたら最う純粹の紳士だぞ、殊に貧家のお育ちとは云へ己れの此の氣品、此の風采、此のピカつく

フロック、サア矢でも鐵砲でも持つて來い。  
己れは初めて呼吸を吹き返した。初めて結婚披露宴に臨む爽快な氣持ちが湧いた。顔色も生きて來た。殊に何よりも嬉しいのは、縮こまつてゐた身心の次第々に伸びて來た華やかな緊張である。  
己れは嚴かに、歩を運んだ。その時、バット硝子越しに己れの眼を射たものがある。それは燃ゆるが如き色彩で飾られた幾十のテールの裝飾であつた。そこには既に果物や菓子類が用意されてあつたが、己れは之れに眼がつくや否やファイと横に眼を外らして了つた。そして獨り言して曰く「紳士はこんなものに眼をくれるモンぢや無い！」

廊下は可成に長かつた。フと己れは更に顔色をハツとかへて困惑した。一體手袋は嵌めてゐなくちやならないだらうか、取り外して居なくちやならないだらうか。之れを人に聞いておかなかつた。しまつた！今この揚々たる意氣を更に此の問題で銷沈せしむるは可憐き事である。さア？ ハテ？ もう直ぐ其處には幾百の來客が待ち設けてゐるではないか、躊躇は禁物、それ敢意決行だと己れの胸、己れの頭腦ばグラ／＼して來た。

暫らく手ぶくろの始末に困つてゐたが、咄嗟に考へた妙策がある。なアに一方を脱いで一方を箆めて居ればいゝ、そして脱いだのを箆めてゐる方の手に持つて居ればいゝ、そして其の手をカフスの中へ

縮めておけばいゝ、若し他の客が箆めてゐたらニッーと伸ばし、脱いでゐたら何時迄も此の義手の型を保ち、腰かけた後で密つと股の下で取つて了へば構つた事はない。さうとも！己れは手早く之を實行した。そして貴顯紳士を氣取つて一歩一歩紳士の態度を持して悠やかに進んだ。休憩室の入口には花嫁花婿及びそれ等の兩親が控へてゐた。己れの最初に眼にサツと映つたのは花嫁の麗はしい姿であ

あゝ何んとその綺麗さ！美しさ！！華麗さ！！誠にその姿、繪でも見た事がない。實物も今が初めてだ。物に動せぬ筈の己れもアツと驚愕の聲を發せざるを得なかつた。實に麗はしの限りである、美の極

華麗の極みである。手に持つその五色の花束もその燃ゆるよそほひの前には何んの風情も無かつた。それ程花嫁の姿は艶麗の限りを盡してゐた。その姿寧ろ神々しさに浮世の人とも思はれ無かつた。己れは慇懃に先づ花婿の御兩親に御挨拶申上げた。次に紋付姿の君僕の間柄の花婿君及び花嫁にヤ失敬式顔を押隠して挨拶した。二人は丁寧ていねいに首を下くびげた。殊ことに花婿は昨夜己れと赤門の前でおでんの立喰たちぐひした様な顔は暖ぬくにも出さなかつた。

花嫁の御兩親にも御辭儀した。顧みれば己れは立所に三度首を下くびげたことになる。それが殆んど一分間も経過らぬ内の出来事であつた。其の上更に親類の方々に御辭儀を連發れんぱつされたので直ちにそれぞ

れ應對した。明日は骨が痛んで首が曲らなく成るだらう。

今日の此の思出を永久に残すとあつて記念帳に己れの名も自署することになつた。己れは立派に墨痕鮮かにもものした筈だつたが、書き終つてから前に連なつた諸客の手蹟と比較して見て、己れのが一番拙へんまづかつたのに氣が附いた。書き代へが出来ると今度は上手く書くんだけどなア。

其處は最早一杯の人であつた。椅子席は今日を晴れと着飾つた紳士淑女で満たされてあつた。己れの眼玉はくるく舞まひ出した。孰れがお豪いお方やら綺麗な令嬢やら解らない程ポーツと上氣して了た。そして我々如き風情が斯麼貴顯の前へ人並み顔して出て來たの

が消え入りたくなつた。

己れは己れの眼に一等近い一來賓の両手に灑がれた。彼は己れの疑問としてゐた手袋を、箆めて居なかつた。己れは思はず此の華かな光景に眩惑された眼を自分の手の上に落して注意した。ヤ、ツ隠して居る筈の急造義手の手袋を箆めた方の手はニユツと之れ見よがしに飛び出てゐる。カーツと眞赤に上氣して慌てふためきカフスの奥深く藏ひ込み、一方の箆め無かつた方の手をヌツクと突き出し「それ此の通り〜」はあ、遅かつた！

遁げる様に己れは後の方へ立話の人をのけ〜身を運んだ。そして空いた椅子にどツかと腰を下ろしてホツとした。見渡せば、燕尾

に、フロツクに、紋付に。

『ヤア西川君』

と肩を叩かれて吃驚、見ると矢張り學校友達の山田君。

『君も来たのか……』

と、グツと見上げ見下しながら、四邊を憚かる小さい聲で己れは、

『君も其のフロツクは借りたんだらう？』

『へーえ、ちや君もか』

と思はず堅く手を握つて大に意を強うする。

餘興の能が始まる、講談が出る、狂言が催はされる、或者は靜聽眼を張り、或者は互に私話を耳語した。己れは無手勝手に机にあつ



た金口の煙草を啣へた、此慶事は再び降つて來ないと許りに。夫れは己れのみで無かつた。立派な紳士と見ゆる人も矢張り。して見ると全く僕と同じ料簡の御仁で御座るな。

狂言半頃、もう全部の客が揃つたんだらう、花婿花嫁は一番前方に着席した。その時己れは花嫁の衣裳の全つきり變つてゐたのに氣が附いた。瀟洒な振袖姿、それも美しかつた。花婿は平生の白い顔が眞赤になつてゐる。大將大分興奮してゐるらしいぞ。

「只今より別席で祝宴を始めます、混雑を防ぐ爲めに御婦人の方に先きに着席して頂きます」と、幹事の方が立つて云つた、皆座は立上がつた。そして次第々々に彼方へ送られた。決して芝居のハネ時

の様に押しつ押しされつ醜態が無かつた。だから己れも恭謙己れを持して静に最後から従うた。

宴會場は萬燭輝き、薫香溢れ、五色の花で燃え立つてゐた。

各人はそれ／＼自分の名札の場所を探した。僕の席は僕の知己友人のと共に一隅を占めてゐた。之は前以つて欣一花婿に頼んであつたので、特に氣を利かして呉れたのであつて、我々場馴れぬ連中、殊にまだ洋食のパクつき方も確かり知らぬ者共とて、若しやの事あつて赤恥を衆目の前で曝さむよりは、斯かる手合は一纏めにして置いてくれ、而うしたら、よしや失策あつても其の場所丈で済むんだからとの願ひが生んだ結果である。

『オヤ君も此の仲間か、驚いたなア』と互にキャツ／＼云つてへらす口、全く此のテーブルの此の連中は一言以つて盡せばフロツク拜借黨ばかりを集めたかの觀がある。早い話が此の席上に於ける下流社會である。

花嫁花婿は式場の中央の椅子に陣取る。その時の嫁御の姿は又變つてゐた。箆笥でも持ち運んであるのか知ら。我々下流社會は多くの頭の間から辛くも二人の後姿に隨喜の涙に咽んだ。

『奴さん悉皆夫婦氣取りで並んでゐるやがる。偶に此方の我々パーチーの間へ來たつていゝのに』

『いや一人で來るものか、今では獨身でないんだぞ、屹度引つ張つ

て來るさ』

『あの仲のよさを見い、チト癪だナ』

『どれ／＼』と、脊の低い一員は伸び上がつて見て、

『全くだナ、花嫁は先刻から俯向き通しだよ、ありや却々難行苦行だせ、同情するねエ』

『妬くぞ其麼事云つたら欣一が』

と下流社會のテーブルの口喧ましいこと！

『ソラ、彼處におちいさんがゐるだらう、奥田市長だよ、花嫁の前の』

『フーン、……其の此方のでつぶり肥つた人は？』

『あれは早川千吉郎さんだ、奥田さんの右に高峰博士北里博士、見

えるだらう？」

「成程お歴々揃ひだ。欣一君も彼麼サークルに包まれたのは生れて初めてだらうなア、死して餘榮あるぞ。然しあゝ一騎當千の面々に睨まれてゐちや好きな洋食も咽喉へ通るまい」

「然し彼奴の割に其麼事は平氣だよ。そら今口へ入れた！」

「花嫁は？」

「猫に小判だ。憾めし相に睨んでゐる」

「此方へ持つて來たら手助けして遣るのに！」  
と孰れも之も育ちの悪い連中ばかり。

花婿の欣一君が夫れとなくボーイに注意したのかそれともボーイ

の氣轉に依るのか、僕等のテーブル計りは各自に料理を取らずにボーイがいゝ具合に入れて呉れる。外のテーブルを顧みると皆麼客の意に任せてあるのではないか。行儀のない連中だから。ぺんに五人前分も浚はれちやアと思つたんだらうか。洋食の宴會へ出た事のない人相だからとの氣轉に依るんだらうか。孰方にしても斯う見込まれちや破れかぶれだ。飲めや唄へや騒げや……どつこい此處は一寸あて外れだ。

「今度は君の結婚の番だよ。頼むから紅葉軒にして呉れ、斯う云ふ機會を利用して片ツ端から東京一流の料理屋覗きをしなくちや。」  
と偽らざる告白が彼方からも此方からも湧く。己れは何よりも驚い

たのはボーイの澤山居ることだ。ボーイの癖に僕等を超越したフロツクを着用してゐる。モーツは杯が各自のテーブルに五ツ宛配合れた。そして葡萄酒よしサイダよし日本酒よし洋酒よしシトロンよしと云ふ具合で各々趣きを異にしてゐる。己れは之を限りに斷然禁酒しようと思つた。此の華やかな杯の數と芳薫を最後として。

僕は屢々雑誌『太陽』其他に於て華かなる宴會場の寫眞を見た。又色んな新聞で何々大臣列席と云ふ文句を見た。その度毎に人間と生れた甲斐に一遍でもいゝから此處所へと思つた。それを己れは眼のあたり實現してゐるのだ。現大臣でこそ無けれ、奥田さんは嘗ては文部大臣の今は帝國最高府の市長閣下である。その方と同席に連

なり、且つ同物をパクつくとは抑々何たる光榮ぞ。我が家門之れより盛なるぞかし。

『あの奥田さんの後の二番に品のいゝ顔の、頭のツルツル禿げた、ソラ今此方を振返へつた……誰れだらう？君知つてるかい？』

『知らない』

『ぢや君は？』

『己れも知らない』

『ぢや彼の方は餘ンまり豪い人ぢや無いんだ、僕は知らないから』  
と下流黨の一員が云ふと、

『その筆法なら此の幾百の中で僕等程豪いものは無いんだよ、君の

知つてゐる連中だから』

と三段論法まがひに座は又ワツと一しきり。今から紅白氷菓のその瞬間、場の一方からパチ〜と拍手雷の如く起る、何事の起つたのかと眸を凝らすと、幹事が立上がつてゐる。『只今媒妁人君塚氏を御紹介します』すると花婿の横の椅子から偉丈夫の紳士が立上がり諄々として媒妁に立つた所以を述べ、花婿は稀代の秀才在學中既に高文は合格、花嫁も亦之におとらざる才媛であるのである。斯るが故に我輩はと大にメートルを擧げる。

それから花婿欣一君の父君は朗讀的に欣一君の今日に至る迄の生立ちを謙讓の風で述べる。之も拍手パチパチパチ。

『只今奥田市長の御挨拶があります』

と幹事は自分が此のことを來賓に傳へるのを誇り顔に聲を勵ました満場驚破と鳴りを静める。

人格の人奥田市長閣下はやをら立上がり、

『私は花婿花嫁の兩親と淺からぬ因縁を有して居る。孰方もよく知つて居る。のみならず花婿欣一君に嘗ては教鞭もとつた。云はゞ先生である。それ故に私の喜びは又格別である。糞くは御兩人幾久しく』と冒頭において親御も息子が之丈けに成つたのにさぞや御満足であらう。私も澤山息子がある。誠にお互さまでと酒脱に遣つて退けられる。

今度は實業界の大立者早川さんや、醫界の耆宿北里博士が祝辭を述べられた。北里さんのは一寸面白かつた。

「筑紫さんは人の身體の脈を取られたが、反對に欣一君は一步進んで國家の脈をとるんである。親父よりずつと豪い。」と盛んに花婿を喜ばせる。花嫁も亦自分の良夫が斯う云ふ具合に云はれたので末頼もしく思つたらう。こつそり手を握つては不可ないぞ。

最後に某府立高女校長は立つて、

「私風情の末輩が仰々しく立つんでは無いが」と白髪頭を撫で、恭謙し、

「私は花嫁の師である。殊に此の際一言なかる可からずであります

す。私は夫婦和合の秘訣を申し上げ度いのです」

皆磨の耳は一時に欷立つて好奇心の眼が動いた。女學校の校長さんだから青柳有美みたいな論も云ふまいと静まり返つた。

「その和合の秘訣といふのは夫婦互に悪人になれと云ふ事です」  
ハテ?

「悪人に成れと云ふと聊か語弊がありますが、互に過ちをしてもその罪を遁れむが爲めに私ぢやない僕ぢやないと云ひ張ります。それが不可ぬ。例へば火鉢を顛覆かへしたとしても、僕が顛覆返へしたのが悪い。イヤ私が顛覆返へす所においたのが悪いと互に罪を自分で被るのである。現にこれは私の實驗上からで」

『イヨ一先生』とワツと拍手。

どの演説も此の演説もお目出度い、お目出度い。

夫れから茶菓が出る。果物が出る。一同華かな談笑に再び花を咲かしてゐると、早川さんがスツと立上がり、にこ／＼して、

『え一幹事の手ぬかりと云はうか、失念と云はうか、茲に御兩家の萬歳を唱へませう。奥田市長に發聲をお願ひします』と、如何にも氣の利いた捌けかた。流石は實業界の親玉だ哩と己れは首を振つて頷づいた。まさか幹事でも萬歳を唱へてくれろと云ふ注文は來賓に出せやしない。お手に入つたものだ。

市長は杯を持つて高く差出した。一同もドヤ／＼立つて手に手に

杯を手にした。己れは此の時程嬉しく此の時程血汐の沸き立つを

覺えた事はない。前大臣現東京市長と乾杯するんだもの。茲に初めて何んだか倫敦の夜會に出た様な氣分が溢れて來た。

『筑紫竹澤御兩家萬ざーい』と市長の聲は朗らかに徹した。

『萬ざーい』と、我々は和した。

『萬ざーい』

『萬ざーい』

虚  
榮  
競  
べ

嘗て大阪で知己になつた丸岡夫婦が上京して來た。妻は雀躍りして喜び「愈々復讐の時期が到來よ」と獨りで拍手喝采した。と云ふのは此の丸岡君の細君（以下M夫人）は和歌山縣一二の素封家の娘で、嘗て僕等夫婦が大阪にゐた時、ダイヤの指環、何やらの縮緬、高貴、お召など、我々男の餘り知らない着物を、來る度毎に着代へて來て「貴女は此麼に着物を持つてゐますか」と見せびらかしたので温厚な己れの妻は其の度に齒齧みして口惜がり「まだ東京の土を踏まない癖に！」とギリ／＼云はせた。彼女はせめて然うして自分を慰めるより外は無かつた。で暇さへあれば、否M夫人の顔を見さへすれば「東京がいゝわ／＼」を連發してゐた。そして「あたし生



「それは東京よ」と小鼻うごめかした。その妻の話上手は遂にM夫人の頭脳に一遍東京へ行きたいと云ふ想ひを刻み込みはしたものの、兎もすれば眼のあたり綺羅を見せ付けられてゐたので、夕チ／＼になり「七度び生れ變つてもこの返報は」と大變な權幕で別れた儘になつてゐたんだ。

「ねえ貴方、何うして復讐しませう？」

「さア」

「早く考へて頂戴よ、私の浮沈に關する問題ぢやありませんか。東京で吃驚させて上げたいのよ。そして呆として魂の脱けた様にしたいのよ、其處所はない？」

「ウン解つた！」

「ど、どこ？」

「須らく帝劇に如かずだね」

「帝劇？ いゝわねえ、さうよ、帝劇！ まあいゝこと、オー我が良人、一寸握手よ」と、グイと握つて、

「田舎者だから屹度アツとオツ魂げるわ」

「ウン、己れも確かに經驗がある」

「あれ、貴方は江戸ツ子らしい顔して被居いな、でないと旗色が鮮かに見えないぢやありませんか」

「オーライ」

それから二人は密議を始めた。ヘン着物は安物着てゐても私は此  
 廢晴の場所へ始終出入してゐるんですよと見付け、次に私等の交際  
 してゐる方に、此麼方がウヨ／＼澤山あるんですよと、アツとさせ  
 る爲に華族の知己で天地に一人しかない上田男爵（假名）を無理に  
 も引張り出すこと、又美貌と品位に於て萬目の焦點たる結婚した計  
 の芝の名望家細田若夫婦にも強て來場を勧誘し、一々紹介してM夫  
 人に目に物見せんす妻の方寸、ウムよいともく。

貴方も最愛の妻の爲に一臂の勞を惜しむ勿れと計り、己に平生よ  
 り小使錢を澤山呉れて、妻は上田男爵の許へ己を走らせ、自身は韋  
 駄天の如く細田若夫婦へ哀願に馳せた。幸ひ男爵の方も若夫婦の方

も『お供しませう』と云ふ快諾を得たので、妻はもう歡喜の絶頂に  
 達し、思はず椽側へ出て『あなうれしーい、よろこばしーい』

一切の手筈が定まつたから改めてM夫妻に向け『明後日帝劇へ觀  
 劇にお誘ひ仕る可く候が御都合如何に候や』と出す。

『來るか知ら？』

と僕は心配相に訊くと、

『あの奥様が、あの着物自慢の奥様が被入らない事があるモンです  
 か』

『だが』

『黙つて見て被居い』

と噂してゐる翌日、返事が来て、

『喜んで御一緒に』

とある、妻はそのハガキを己れに突き付け『それ御覽、此の通りよ』  
『成程』

それから一應妻は帝劇へ電話をかけ、その足でM夫人の所へ道廻りして明日は幾時頃本郷三丁目の乗換場所待ち合はすこと、悉皆手筈を定めて歸つて来た。そして『あの方は什麼に吃驚するでせう氣附薬でも持つて行かうか知ら、ホッく』と有頂天になつてハシヤギ己れに向つて、

『貴方と私は毎月二回位帝劇へ行つてゐる様な風をしてゐるんです』

よ、解つて？』

とボーンと優しく脊中を叩いて呉れた。断じて悪い氣持はせぬぞ。

愈々當日になつた。四時に家を出ると云ふのに妻は朝から仕度に掛つてゐる。女て本當に何時も之だから我輩旦那様はウンザリする。まア人一倍綺麗に見せたいんだらう、平常と違つて今日は帝劇行だし、それに丸岡夫人を凌駕しようと思ふ野心を伏藏してゐるんだから小言を云はずに黙つておけ。

いざ出發となつて、己れは己れのネクタイ留を妻が何處に置いたか見當らぬ。急つかちの己れは貴重なる一秒に於て爆發した。

『ど、どこに置いたんだ？』

妻はモジ／＼して、

「確かに私し鏡臺の引出に入れておきましたんですよ」

「無いぢやないか、咄嗟になつて何んだ。だから先刻あれ程皆塵揃へておけと云つたのが解らないのか、不注意者め、馬鹿ッ」

「え、私はどうせ馬鹿ですよ、此塵馬鹿を何故貴方は妻に爲すつたんです？」

「ム、ム」

と己れはグイと詰まつた。

「探せッ」

「幾程探したつてないんですもの！」

「困るぢやないか、本當に氣の利かない女だナ」

と怒髪一寸天を衝いた、妻はポロ／＼泣き出した。

「え、其塵に怒らなくつたつて！ わ、わたしは幾程女だからつてあ、あ、あんまり」

「オイ、オイ、時間が無いんだよ、さア／＼己が悪かつた／＼、顔をお出し」

と云つて、誰れも見てゐなかつたから己れは涙を拭いて遣り、

「さ、さ、機嫌を直して。どうだ好い旦那さんだらう、ね、そら、ね」

と脊中を撫で、遣り、素早く時計を見て、

『あッ遅れた、三分遅れた、そら行くよ、行くよつてたら』  
と煽ぐ様に急ぎ立てるのに、妻は『だつてあたし』と云ひながら又  
も鏡臺に向ふ。

三分が五分遅れ、五分が十分遅れて二人は今まで喧嘩してゐた様  
な顔を腰にも見せず、莞爾に微笑ながら  
「さア行かう」

本郷三丁目で電車から下りると、其處には待ち疲れた様な顔をし  
て丸岡夫婦が立ちあぐんでゐる。己れと丸岡君は「やア」と山高帽  
を脱いで、第一にお互の顔と顔とを親しく見合つた。然るに妻及び  
M夫人は顔を見合はすよりも、第一に互の着物に眼を灑いだ。そし

て互に何か得心づくがあつた様子。茲だ男と女の違ふ點は！

一同は電車に乗つた。己れは常に妻の容色とM夫人の容色と比較  
して見るに、伯仲の間にあるらしいと思つてゐた。何うしても甲乙  
を採點られなかつた。お互は今日こそは美の絶頂を示してゐる時だ。  
こりや一ツ公平なる乗客の判断に任かして見るに如かずである。若  
し乗客の眼が孰方か一方に期せずして集中したならば勝ちはそのれに  
ある。何故ならば、より美しき花を見たいのが人情であるから。

己れは乗客の眼ばかりキヨロ／＼注意した。果してそれ等の眼は  
一様に一物に灑がれた。己れは其の注がれた方面を注意した。オヤ  
／＼當てが外れたぞ。それは皆M夫人の方へである。戯談ぢやない、

正面の男も隣りの男も向ひの男も。

己れは何故妻がもう少し白粉を餘計に附けて來なかつたのかと齒痒くなつて妻の横顔をグイと睨んだ。妻は素知らぬ顔してゐた。ほんとに良人がこれ程心配して遣つてゐるのに！

成程己れの妻は確かに敗北だと云ふ事は之で漸つと解つた。して見ると伯仲だとしてゐたのが己れの慾目だつたのかなア、然し妻安心しろ己れは立派に敵打をして見せてやる。そら丸岡君と己れと比べて見ろ、オホン己れが上手だらう。

帝劇に入ると、その金色燦爛たる光景にM夫人は呆として了つたらしい。此の夫人に優る幾倍の容色を持てる貴夫人令嬢は恰も「汝

いづこより來たれる」と云ふ顔附して都の風俗これ見よがしに卑下の眼を以てした。M夫人は小さくなつて眼をキヨロ〜。其處へ豫ねてから約束してあつた連中の姿が見えたので妻はM夫人を引張つて其の中に駆け付け、

「此の方は上田男爵夫妻です」と、姓は小さく云つて破れる許の大きな聲で男爵ツと紹介した。M夫人は床に頭を擦付けむ許りに畏まつた。華族と云へば身體から後光が指して勿體ない様に思つてゐるのか知ら。妻は「先日も何んの御愛憎も致しませず飛んだ失禮を」と、さも馴々しく上田男爵に言葉をかけた。此の人は私の内へ始終遊びに被居るんですよと云ふ氣配をM夫人に見せ付けむが爲めに。

續いて天女の如き細田夫人が『まア西川さんの奥様』と駈け寄つて来たので、妻は『オー、よくこそ』と懇ろに言葉を交はして又もM夫人に紹介する。M夫人は未だ場所馴れぬ悲しさ、挨拶も碌々出来ず、首を下げた儘グツとも云はない。妻は男爵夫人細田夫人と盛んに『まアさう？』『だつて』『でもあたし』と獨特の江戸ツ子辯を晴れやかに振り廻はし、M夫人を時々見返へりながら『着物ばツかし立派でも駄目よ。往年の恨み思ひ知つたか』と云ふ顔付。そして故意と二階三階と引き摺り廻はし、四邊に聞えよがしにあれが食堂、これが食堂と田舎者待遇にすることく。ともすればお江戸生れに見せたいM夫人、その度毎にハラハラしながら、妻の耳元へ口を寄

せながら、

『後、後生ですから小さい聲で云つて下さいな』

又その日己れは無暗に何うした日の廻はりが宜かつたのか幾人となしに知人に逢つた。而かもそれが悉く立派なセントルマンのみで夫れ等の人は口々に『君を誰某に紹介するから』と幾組かの紳士淑女に引き合はし、方々は期せずして『まア貴方があの西川さんですか、まア』と出て、『是非奥様に紹介して』とくる。その度毎に妻を呼ぶものだから、彼女は揚々とM夫人をおいてけぼりにして馳せ参じて、相手厭はず翻るゝ愛嬌の下から睦まじさうに語る。その様恰も交際場裡の花形の様に見えたので、M夫人地団駄踏で口惜がり、

「今度は什麼着物を見せびらすか覺えて被居い！」

臆て閉場るや否や妻は拜む様にして男爵の自動車に同乗を冀ひ、漸つと同乗を許して貰ひながら、微塵も其麼風をして見せず、夫人の前へ進み行つて、

「私共は自動車を雇うてありますから、之で失禮!!」

日本の美人訪問記



嘗て淑女畫報に日本三都美人の代表者として東京日向きむ子女史  
 大阪吉崎李枝子夫人京都九條武子夫人の寫眞が載つた。いくら比べ  
 ても兄たり難く弟たり難く恍惚とする容姿振りであつた、己れは一  
 遍でもいゝから此の御三人に逢ひたいものだが、花の都に住む悲し  
 さ大阪も京都も東京からは『茲はお國を何百里』の感があつて兎て  
 も行けさうで無い。

そこで之は一番帝都一の美人日向きむ子女史を訪問するに如かず  
 と思ふた。東京一なら即ち日本一であると云つても差支へない、し  
 て見れば日向きむ子女史は日本一の美人と推讃しても異存は無から  
 う、よしや日本一に不賛成を唱へる人があつても要するに第三等以

下になる事はない。何故ならば『用意——ドン——それッ』とお三  
 人の駈けッ競が始まる、武子夫人が息切れする様に決勝點へ『い、  
 い、一等賞』と兩手を高く翳して入る。續いて李枝子夫人が『二、  
 二等賞』と大呼息吐息、間髪を入らずしてきむ子女史が『あたし三  
 等』とくる。だから負けても三等日本三美人の一人である、それ皆  
 の者跪づけよ。

何はともあれきむ子女史は世界の大都東京を背景にした美人であ  
 る、日本一であらうが二であらうが三であらうが要するに東京一で  
 ある。

己れは逢ひたい見たいが山々になつて來た、ごんなのが東京一な

んだらう、あの毎夜御良人と共に銀座の夜を散策する數多き眼も醒むるばかりの夫人連をして後へに撞着たらしむる日向きむ子女史、是非とも拜まなきや極樂に行かれぬ一え。

己れは早速戯談口一つ利いた事のない様な四角四面を作つて『御拜顔の榮を得たく候が』と出した、そして地獄極樂の境にヂツと待つてゐた、すると直ちに『二十五日過ぎなら』と云ふ返事を受取つた、極樂の道を辿れとの仰せである、有難仕合の儀に存じまする。それぢやと己れは早速翌日訪問しやうと思ふた、けれどよく考へて見ると、突嗟に訪ねたとする、『それッお鍋お客さまだよ、早く座敷の子供の玩具を片付けて』と大まごつき、御自分は慌て、白粉を

塗るやら着物を着代へるやら大騒動、お湯が沸いてるかお菓子があるかと四方八方へ性急に氣を配らねばならぬ、己れと話合つてゐても若しやお鍋が粗忽を仕出かさぬかと氣が氣で無からうと思ふ、それは己れの經驗上チャンと知つてゐる。殊に女の白粉付けぬ顔で見られたものぢや無い、それも同じく己れの妻に依つてチャンと心得てゐる。

だから己れはきむ子女史が豫め白粉を澤山塗つて待つてゐる様にと氣を利かして『お返事に依り明朝お伺ひいたしますから』と前振れの葉書を出しておいた、その代り己れだつてきむ子さんに『アラい、男だわ』と思はれる爲めに三日前に散髪したんだけど、モ一遍

顔を剃り直して行くんだい。

晝飯最中の時己れは妻に明日さむ子さんを訪問するんだよ。なアに女だもの、鶉呑みにしてかゝるさと話すると、

『あの方は何んでも出来ぬもの無しで、繪でも文でもそりやお上手なさうですよ、それに人物が貴方よりズツと上らしいわ』

『さうかも知れないア』

と返事したもの、最後の一句で己れは面白くない氣になつて旨い飯が碌々咽喉へ通らなかつた、己れはさむ子さんと友達の氣になつて親密に話合はふと思ふてゐたに、妻は僕が行かぬ先きから怖氣を附けてさむ子さんの前で縦横無盡に己れと云ふ人間を發揮させ様とは

せぬ、コラ妻己れだつて學古今に通じてゐるんだぞヤイ（己れは腹立つた時に限つて妻を呼ぶに斯う云ふ代名詞を使ふ、お育ちが華族の落胤で無いと人間は此廢者か知ら）。

他人の話に依るときさむ子女史は長い間病氣で入院してゐて先日退院した許りだから君が非常に美人だ〜と思ふて行くと存外色褪せ頬こけてゐるかも知れぬ、それは如上の理由であるから其の積りで逢はなくちや可哀想だよと入智恵して呉れた。洵に御愁傷さまの事である、だから己れは顔を曇らして其話を聞いた、御都合の悪い時に面會を申込んだものだ、おゆるし下され度く候あら〜かしく。兎もあれ己れは明日は日本で一二を争ふ美人に逢ふと云ふので妙

に昂奮して了つて、先刻迄何處かその邊の西大久保の片田舎の散髪店で顔を剃る考へであつたのが、俄かに思ひたつて遠い／＼銀座の横町の有名なる床屋へ駆け付け、

『高價くてもわしや厭やせぬ、うしろの禿を旨く隠して呉れ!!』

出て来た時には見違へるばかりの美男子、我れながら胸がソワ／＼したので其の近邊の友人を手當り次第に訪問し、頭をヌツクと突き出し『ごうだ、見え無いだらう、見え無いだらう』

家に歸れば妻は思はずアレと讚嘆の聲を放ち、

『オヤまア貴方は』と拍手喝采して、

『今日の貴方は中將姫のおとし子みたいだわ、良人が始終斯うです』

と一日中でもあたし一緒に散歩して上げてもらわ、そして頭の綺麗なこと、一寸此方へ』

觸つちや不可／＼、折角の銀座の横町が駄目になる。

翌朝になる、空を見上ぐると慶應の野球應援歌ぢやないが『天は晴れたり氣は澄みぬ』と云ふ上天氣、フレイフレイ日向きむ子と云ひながら訪問準備に取りかゝる。

茲で己れは頭搔き／＼白状する、己れの着物つたら孰れも之も木綿ばかり。見下げられちや不可ねえーと思ふたので洋服を着た、ハ／＼新調だ。序でだから憚りながら口上此の秋妻と己れとは大嶋の羽織着物を作ることにはチャンと約束してあるんですからね。コレは

大びらに豫告しておく、未だ云ふまいと心掛けてゐたけど嬉しくて胸に包んでおけやしない。

靴は大學正門の前でツイ先達拵へたばかり、やんごとなき方の所へ行く時にと秘藏に秘藏しておいて未だ一度も土に觸れない新しいもの、我が財産中一番高價なもの、之れを履いて行く、よしや此の男振りがきむ子さんに振られても此の靴は振られまい。まア見たまへ己れの顔艶よりもつとい、艶ぢやないかソラ。これを今日の訪問に雨でも降つて濡らしたら命に代へ難い一大事だと思ふたら、豫め前以つてきむ子さんに『若し明日雨降らざれば』と附言しておいた、聽いてごらうぢろ『イエース、然り源氏の君』と花唇綻

びるに違ひない。ステツキは銀座の夜店で口角泡を飛ばして値切つたもの、煙草は普通は朝日だけと先日敷島を他人様から貰つたから、我れは常に敷島燻かしてゐる様な面付してゐる積り、之れで忘れたものは無い筈。

『妻ツ、それぢや行つて来るよ』

『確つかりなさいな』

敵打ちに行くんぢやあるまいし。

『貴方ツ、一、一寸』

何んだ？と振り向くと、

『まア御容姿のよさつてないわ、大丈夫待遇ることよ』

し、し、めめたッ。

午前十時に訪問と知らせてあつたので、九時前西大久保の自宅を出る、他所へ出す郵便物の序でに局の時間を見ると己れの時計が卅分も遅れてゐる。慌て、駆け出す。

水道橋で集鴨行きに電車を乗換へて白山の次ぎの停留場曙町で下り、半町程進んで左煎餅店と太福屋の横町と教へられる儘に各表札を眺めたが、どうしても見付からない、途方に暮れてゐる所へ、一人の美しい小間使みたいな女が手に葉書を持つて来るのに出會した、あの有名なきむ子女史をよもや口善悪なき若い女だもの、知ら

ぬことはあるまいと『一寸伺ひますが』と他人に物を尋ねる用式言葉を出して訊いた。するとハイと返事しながら黙つて後戻りする。『オヤそれぢやあんたは日向さんの』と口まで出たが、紳士は軽々しく無駄口を利くものぢや無いと突嗟に悟りを開いて黙つて隨いて行く。

『あすこからお入り下さい』と云ひながら女は駈ける様にして自分は裏の勝手口へ廻つた、それぢやと戸に手をかけむとして表札を見ると宇治百とあつて日向きむ子と書いてない、可笑しいな、違つてゐるのか知らと一寸モジ／＼する瞬間、微かにピカツと二階に脊の高き女の姿が寫つた、殆んど一秒、あッ確かに寫真で見たきむ子女史

だ哩とサツとあける。それ見ろ己れがチャンと明日は行くぞと前振れしてあつたので塵一本見當らず打水さへしてある。思はずニツとして玄關をあけて入ると先刻の小間君チャンと手を附いて待つてゐる、名刺を出して示すまでも無く『ごうぞ』と來た。

そこで己れは靴を脱いだ、其の時女の姿が見えなかつたから慌て、ポケットから顔拭くハンケチを出してパツ／＼と塵を拂ひ心の中で『へん此の靴見てくれ!!』

三疊の上り口に近頃功能顯著と好評あるきむ子女史發明の『オロラ』の壇が小さい机の上に所狭き迄並べてあるを見て二階の段に足を一歩踏みかけた。フと思ふた、それは妻が今朝己れの家を出る時

に『貴方は一番最初どう云つて挨拶するの？豫ねてから御高名をぢや古いことよ、近頃御多忙でせうなハツ／＼とハツ／＼に大きい所をお見せなさいな』と注告して呉れた言葉があつたので、やをれ顔を見たら最後ハツ／＼だぞと大に得心あつて上る。

己れは其の口上をチヨキンと座つてから述べる筈で故意と俯眼勝ちになつて今し女が運ぶ座蒲團を待ち、さて咳一番ハツ／＼と出ようとする其の出足へ、

「まア遠い所をよくこそ、さアお敷き遊ばせ、私がきむで御座います」

と先んせられ、思はず釣り込まれて、

「私が西川でございますハツ〜」

これぢやハツ〜が全で滅茶々々だ。さア首を持ち上げるぞ、持ち上げたら日本一の美人日向きむ子女史のお顔を拜観出来るんだぞ、そら上げるぞ、見るぞ、上げるぞ、そらッ。

オヤ〜〜。

さてよ、今度は眼を擦つたよ、モ一遍あげるぞ、見るぞ、そらッ。オヤ〜〜。

己れは身體から後光が出る様に思ふて来たんだに！きむ子さん腹立て、下さるなソバ滓があつた、首筋が淺黒かつた。

けれども其れから對話してゐてチヨイ〜顔と顔とを見合はす度に

『いゝなア〜』と味が出て来た。第一その眼がなんとも云へぬ美しかつた、うるみのある大きいそして潘る、様な愛情が含まれてゐた。又顔の型、それにも一點の非難の打ち所が無い。鼻と云ひ輪廓と云ひスタイルは立つたのを見なくちや解らぬが、好ささうに思はれる、何故ならば脊が高いから。

然し己れはもつと〜眩しい許りのおん顔だと思ふて来たんだに。日本一だ三美人の一人だと餘り期待が大き過ぎたからであらう、假令へば田舎者が東京を見て、之が日本一かと存外驚かず、さて再び村へ歸り又新たに東京へ来て見て初めて東京の眞價が解ると同じく、己れも一遍外へ出てよく他の女を研究し、又きむ子女史に



逢つたら『あゝ矢つ張り日本一』と思ふたかも知れぬ、然し兎に角一寸當が外れた、死ぬか活きるかの長い病氣の爲めちや無いか知ら、構ふもンか後學の爲め須らくお訊き申すんだね。

「早速ですが、奥様貴婦はお病氣に成つたので我れながら愛憎の盡きる程容色が失せたと思ひませんか、どうも露骨で恐入りますが」と頭かきく、その癖片唾を呑んで耳を濟ました。

さむ子さん少つとも動せず「思ひますねえー」と、お出でなすつた。「え？」と顔を擡げると、

「毛が抜けて、顔が淋しくなつて、それに眼の縁が悉皆窪んで了ひました、それ御覽なさい」と左の手でスツと撫で、見せ、

「近頃は滅切り可くなつたんですよ、申上げるも如何かと存じます私が私のオロラは非常に此處のに利くんですよ、ですから漸次よく成つて參つたのです。全くそれにズン／＼年齢も老つて來ますからねえ、子供が六人もゐますよ、十六を頭に」

『十六!? え、ッ』

と、己れは眼を丸くした。今更の如く繁々と又も見入つた、その刹那先刻まで少つとも氣が附かなかつたけど、帯も衣服も皆眞黒で至つて地味を極めてゐた。全で世帯女房式であつた、之れちや假令楊貴姫でも美しさがはえぬと思ふた、若し着物が華手な柄の物であつたら、此の打ち所もない型、どんなにか美しく見ることが出來たら

う、あ、惜しい〜と己れは我が第一印象の爲めに他人事ながら残念に思ふた。いろんな話が出た。

「與謝野晶子さん、あの方は私し豪い人だと思ひますねえ、彼れ丈けの子供さんをお持ちになつてゐて、詩と云ふことをお忘れに成らないんですもの、他人の眞似の出来ぬ所です、お逢ひになりましたか」

「いゝや」

「逢つてごらんなすつたら」

「いづれ其のうち」と軽く受け流しながら、

「奥様、貴方は江木さん——欣々さんですね、どう批評なさいますか」

か

「さア」と暫しヂツと考へて、

「あの方は非常に裏表があります、外面はきらびやかに醒むる許りにけばくしく着飾つて被居いますけど、心は全ですうですわねえ女丈夫見たいな方ですよ、社會學の立場から見ると」

オイ耳搔を呉れ。難かしく成つて來たぞ。

「さうですわねえー男らしい方ですわねえ。何かあの方は思ふ所あつて故意と華かな風をしてゐるんだらうと思ひます、だから随分他人から誤解を受けられるらしいです、誤解と云へば私も随分誤解を受ける方ですが」

「ハア？」

「そりや馬に乗つたり自轉車を乗り廻はしたりしたのは大に悪うございましたけど」

と、可愛らしく前非を悔ひ改め、

「他人に依つては私を賢婦人と云ひ、華手な女の様にも云ひます、けれども私は賢婦人でも無ければ又華手な女でも無いんです、只ぼんやりしてゐるんですね、ぼんやりしてゐればこそ斯うして遣つて行くんですね」

己れは挨拶の仕様が無かつたから爪をいちくつて聽いてゐた。

「奥様、貴婦は他人からきむ子さんと呼ばれた方がいゝですか又奥

様と云はれた方がいゝですか、孰方です」

と、我れながら妙な問ひを發する、きむ子さんその時此の人は源氏物語を譯する様な考への入る質問を發する方だと溶かす様な優しい眼元に笑みを浮べて、

「わたしはきむ子さんと申して戴くと非常に自由な氣がしますよ、茲に一寸但し書きが入ります、但しきむ子さんと云はれるに厭な人がありますね」

「例へば？」

「さア」と思ひあぐんで「一寸口で形容が出来ません」と尻尾を捲く。斯うしてそれからそれへと話を續けてゐる程に、きむ子さん

に何んとも云へぬ親しみを知らずく覺えて來た、暖かい柔かな温やかな感じが犇々と迫まつてきた、他人を訪問して此麼氣持ちのよかつた事はない。

脳病院にゐる主人の入費姑の費用それに子供六人の生活は自分一人の腕で遣つて退けるんだと云ふ。豪い！と己れは思はず讚嘆した、「その方法は？」と思はず餘計な事だが訊かざるを得なかつた、すると自分の發明の化粧品がよく賣れるので、手一杯に遣つて行けます。残りもせねば足りもせずとの事であつた。

「まだ外に私には妹が一人ゐますよ」

「妹さんが？幾ツ？どこに？」

「天神下に。十九歳です」

「初耳です、斯う云つちや何う致しましてと仰しやるかも知れませんが貴婦は天下の美人ですから妹さんも美しいでせうなア」

さアきむ子夫人返事は如何にく、一寸眩しい氣持ちがするでせうとチツと眼を据えると、心ばかり夫人は横を向いて、

「非常に可愛いゝんですよ」

「貴婦はその妹さんを何處所へ嫁りたいと云ふ希望ですか」

「婿を持たしてもいゝんですよ。兎に角金が無くても身分が悪くても構ひません、要するに純な人に上げたいと思ひますね  
いゝお心掛です。」

「純でさへあれば。然し幾程姉の私しがさう思ふてゐたつて妹は何  
う思ふてますか、妹だつて然う思ふてゐるらしいです、もう年頃です  
もの、自分で此の人こそと思ひ込んだら」

やアい、姉さんだなア——。

「奥様、何故日向きむ子と云ふ表札をお出しにならないんですか』  
と矢をむき代へた。

「それは色んな事情がありますが、大きな原因は彌次馬が通りすが  
りに一寸寄つて行くんです、唯寄るんですよ、其麼者に一々應對し  
ては遣り切れませんからね」

さうとも、さうとも。

「だから出さ無いんですよ」

わ、わかりました。

先きに書く事を一寸忘れたが、きむ子女史から己れは二本の葉書  
を受取つた、その字蹟を見て己れは實に旨いものだと感じ入つて了  
つた、その能筆！すら／＼と枯れた筆の運びの美しさで無い、字體  
若しその人の體を現はすものとせばきむ子夫人は顔の如く氣立も亦  
白百合の如き美はしき心根の人であらう、又そんな心でなくちや良  
人を養ひ姑をいたわり我が子を哺ますと云ふ事は出来ないだらう、

イヨ—貞女!!。

感心と云へばきむ子女史は何かと云へば無性に感心したがる性だ

さうな。

「貴婦みたいな方は御交際が廣いでせう？」との問ひに、

「いゝえ」と烈しく首を振つて、

「皆さん然う思ふてゐらつしやるらしいけど少つとも、ホンの僅かばかりしか。私しは其麼女に時々見られてゐるらしいですね」

現に眼の前にゐる男でさへ。さては違つてましたか、之は恐縮頓首。

「私の今の天地は自由です、廣びやかな大空です、自由にも二種ありますね、自由を得んが爲めの自由と、自然の自由と」

少々むづかゆく成つて來たぞ、

「然し今の私は魂の自由に暢やかとしてゐます、よしや精神身體に苦痛と疲勞があつても」

結構ですナ。

「ですけど幾程自由であつても内心に何處か悲しみと云ふものがあるもんですね」

「そりや然うかも知れませんが、あるかも知れませんが」

己れは經驗がないから推理上から判断した、一寸生意氣だナ。

「私しは又世の中に眼があげばあく程男の世界と女の世界が全で違つてるのに唯驚くばかりです、随分世の中を悟つてゐた積りでした

けど日を経るに従ひその感じが深いんですよ」

ブーンと藝術の香ひのするお話だ、ヂツと考へさして貰ひませう、どう答へていゝか「さうですかなアー」以外に返事の仕様がな、まア此の邊で切り上げた方が得策であらう。

『大變長く御邪魔を』と立ちかけると、

「まア未だいゝぢや御座いませんか」

と、暫しと押し止め給ひ、

「貴方は飄逸な人とのみ想像してゐましたが、仲々深刻な方ですね  
「え」

アレー。

立上がつて青葉の清々しい風情を見ながら『己れの家と孰方が、こ  
んもりしてゐるか知ら』と頭腦の中で比較をしながら日本三美人の  
一人に送られ、揚々として梯子段を下りかけ様とした拍子にブラ下  
がつてゐた電燈にイヤと云ふ程ゴッーン。見る／＼紫色に腫れ上  
がつた瘤を擦つて『さ、左様なら』





などは二つも所持してゐる、己れと云つたら五年前に買った情けないニツケル時計を天下之より時計はないと云ふ有様、情けないとも情けないとも。彼等は故意と己れの眼の前で「オヤ何時だらう？」と云つてピカツと輝めかす、その時の口惜しさ、その度毎にウームと齒を噛みしばつて、何にか時機あらばおのれ物見せくれんすと己れの人に負けッ嫌な性は肉をピク／＼動かして只管時の到るを待つてゐた。所へ此の不時の全く豫期しなかつたものが天から降つて來たんだ、いで何をおいてもそれ金時計だ、金時計さへあれば假令身にはぼろを着てゐても、あれ見よあの御仁は金時計を持つてゐる、只の人ぢやあるまい、何處へ出しても恥かしからぬお方ぞと内々尊

敬の崩が相手の眼に寫るに違ひつこないんだ、此の己れが之まで始終さうだつたもの。

上田男爵のお母アさんが己れの顔を見る度に出世しろと口癖の様に仰しやる。それ程己れを案じて下さるのだ。金時計はそれ出世の表徴である。それさへあれば「あゝ貴方も金時計を持つ様な身分になつて下さつたか、之で死んでも本望ぢや」と老の眼に涙を湛へて喜ばれるかも知れぬ。

又細野君は成程金時計を持ち持は持つてゐる。然し彼の懐中時計はもう時代遅れの古物なんだ。腕巻が欲しい／＼今腕巻が流行時だから、然し當分買へまい、どうかして手に入れたいものだど始終云つ

てゐた。そこで己れがポーンと突然に腕巻の素敵なのを買つて、どうだ此麼のを持つてゐるかと思せびらかしたものだ。云はゞ彼の機先を制して、ポカンと開いた口を見てやりたいのだ。

何はさておき金時計だ。序に此の萬年筆も古くなつたし、醫者の未拂分も。妻は又妻で上等のコートを買ひたいとある何でもかでも買へ買へ、金はあるうちにウンと費はなくちや。

妻の喜びも勿論槍ヶ嶽の絶頂である。二人はそれツと殆んど無我夢中になつて夕方から銀座へ飛び出した。

お恥かしい話だが餘りの嬉しさに二人とも聊か精神に異状を呈した位興奮して居つた。

その證據には時計は服部で買ふに限ると服部を目ざして來たのがどう見迷ふたか天賞堂をテツキリ服部だと感違ひして、遮二無二飛んで入り、

『オイ金時計を見せてくれツ』

鼻息の荒いこと。

番頭共、なアに此の風情なら精々の所で素見し位だらうと高を括つて、碌々入つて行つても見向きもしなかつたが、己れが斯う怒鳴ると、不思議相に顔を見詰めながら、

『へ、へイ？』

『金時計をツ』

「へーイ、」

番頭さんは一寸意外に打たれて、懸て之は大事の御客様とばかり、  
「い、お月さままで」

「お月さまなんか何うでもいよよ。」

「どんなのを御覧に入れませうか」

「腕へ巻くのを」

「幾價位なのを？」

己れはグイとした、嘗て金時計を買つたことの無い悲しさ。途方もない高價のものやらサツパリ見當がつかない。萬一極上等などと云つて豫算超過を來たした日にや飛んでもない尻尾を見せなくちや

ならないと思ふたので、

「まア色んなのを見せてくれたまへ」

と鋭鋒いさゝか鈍る、鈍つてもいよ。なんと云つても金時計だ、

オイ番頭ツ、ニツケルや銀側なんどのお客に相手になるなツと云つたら!!

時計は直ちに幾十と並べられた。これは形が悪い。これは數字の書き方が悪い。一昨日盗まれたのなんかと較べものにならねえと増枝を顧みれば、「え、彼品はよかつたわねー」と妻旨いぞ、旨いぞ。あれか之かと吟味に吟味を重ねて到頭一つの腕巻時計を選び出した。

「ちや之にするよ」と指定した。

「腕巻鎖は如何です？」

「鎖と云ふと？」

「此の皮の代はりに金の鎖でお巻きになるんです」

「へー其廢物があるのか、初めて……」

と云ふと、妻はグイと人知れず小ヒドク膝をついて、

「それ一昨日盗まれたあれぢやありませんか」

「え？」

と覺えず出ようとして妻が眼で知らしたので、

「あ、あ、あれのことか——い」

と、悟りが遅れたので思はず頭を搔く。

「まア見せてくれたまへな」

番頭は運んだ。皆ピカ／＼としてゐる。何よりも値段と相談だと

見ぬ振りしては正札を見、グイと高價いのは「之は形が悪いなア、

なんだか面白くない」と巧妙に刎ね付け、安價いのばかり集めて「之

はい、素敵だ」

と云ながら安いのを密つそり撰んで、

「此の型はい、ねえ——、之が一等だ、どうです流行でせう、ちや

之にする」

と、懐から紙幣の束を掴み出し、無雑作にバラ／＼、持つて

ゐるだらう。

直ちに篠めて外へ出た。所か生憎折角腕に巻いたのが洋服に隠れて外面から見えぬ。之れちや金時計を持つてゐるのかゐないのか判りやしない。君子大に窮した。須らく身分の向上を相手に示さむには、宜ろしくあまねく衆に知さなくちや金時計のオーソリチイがゼロになる。

憚りながら己れは臍の緒切つて初めて金時計を持つたんだ。之を最初に示すのは夜の銀座、日本一の銀座の真中でござい。己れは如何にせばとコクリと小首、遂に案出した。

己れは拭かなくてもいゝのに無暗にハンカチで首や顔を拭いた。

殆んど間斷なしに、斯うすれば勢ひ手は高くあがる。同時に服は自然に捲かれる。

所か皆塵は割合に平氣で通り過ぎて行く、彼等は屹度自分も持つてゐるから珍らしくないんだらう。然し己れの心の中へ入つて見い、げに其のことが面白くない事であるよ。何故アツと屹驚の表情で見してくれないんだい、柄にもないと心に思ふて通り過ぎるのか、又はどうせ若様らしい顔付だ、あゝ云ふ物を持つてゐるのは當前だと思ふてゐるのか、後の文句だつたら大賛成!!。

二人は臆て電車に乗つた。嬉しや殆んど満員に近い人であつた。だから勢ひ釣革にブラ下がらなくちやならぬ。いつもだつたら『少

々お膝を』と無理に割込むんだけど、今日の己れはたとへ空席があつても立つてゐるぞ、ブラ下がるぞ。

己れは釣革を握つた。見よ金は光つた。然し僕は之をヂツと見詰めてゐたらさぞや自慢さうに見せびらかしてゐる様に思はれるからと故意と平氣な面構をして居た。

グイと己れの隣りに立つてゐる一紳士の眼さきへキラツ。

相手は「オヤ」と云ふ表情を示した。ヂツと見据ゑた、己れはその様子を流し眼で見た。どうだ君、羨しいかい、エヘツ。

もうその男には洗禮が濟んだ。己れはグン／＼押す様に割込んで他の客の所へ身を進めた。そして其處で位置をしめた、型の如くキ

ラツ。今度は三人程の眼が一時に集まつた。その時の嬉しさ、然し茲でニツとした顔の作りをしたらバレるぞ。努めて『此處物位』てな扮装をするんだと虚心坦々。

妻は客に金時計の感應がある度に脊中を小ツいて知らせて呉れるげに忠實のワイフなる哉。

家へ歸つた。嬉しさの餘り靴を脱いで座敷にあがるが早いか譯の解らぬダンスを始める。妻は氣狂ひになつたんぢやないかとオドオドして見てゐたが、一寸確つかりした所があつたので安心したと見えて、自分も同じく馳せ参じて、テツカタテツカテ、テーテカタと得體の知れぬダンスを一しきり。金時計ダンスと早速命名式を擧ぐ。

「まあいゝこと一寸見せて下さい」  
妻は自分の腕に簞めて見、

「オヤあたしの右腕にはグラ〜よ、だけど左の腕は太いからヒョツとすると」

と云ひながら、左に代へた。恰度旨く簞まつてピクともグラつかない。

「まあ御覧なさい。明日丈けあたしに貸して頂戴、今日の電車の中の貴方の徹を踏んでよ、いゝこと？」

いゝとも!!

金時計!! 今夜は己れと一緒に寝よう。

○

それからは寝ても醒めても金時計のこと許り、朝は顔も洗はず金時計を押し入れから戴き出して伏し拜む、その時己れは必ず『オー光つてるなア』と獨言して悦に入る。

或る日のことである。

「妻 一寸茲へ来い」

「なアに？」

己れがニコ〜してゐるものだから、稍媚を示して遣つて来る。

「まあ坐われ、立つてゐては話が出来ぬ、さて外でもないが此の金時計を」

「？」

と妻は己れの腕の時計に眼を凝らした。

「之を細野君の妻に見せつけて来ないか、細野の妻にアラ西川さんは先日は新調の洋服を拵へたし、まア近頃は何うしたんだらうと思はせて来い、此の間西川さん貴方のネクタイは三百六十五日間おんなじだわと少々己れを侮辱したから」

「又實際さうなんですもの！」

「お前も侮辱するかッ」

「侮辱ぢやないことよ、真理だわ」

「そんな真理は止めにせい」

「ぢや一寸貸して下さい、此の時計をあたしの時計見たいにして行かませうか」

「それも面白いな」

「一寸箆めて見ませう、ね」

と云ひながら妻は自分の手に翳した。

「アラ駄目だわ、これは男持ちの鎖だから、ソレ御覧なさい、あたしの腕が細いものだから時計が宙ブラリよ」

「もつとグツと上の方の太い所で絞めたら何うだ？」

「こゝ？」

「ウン」



「茲ならいゝわ、だけど着物の中へ隠れて見えやしないんですもの」  
 「仕方がないなア、細野にやどうせ化の皮を現はされる時機が来るんだから正真に白状したら何うだい、良人が此麼時計を買つてから生憎誰れも訪問して来ないから張合のないこと夥だしい、仕方がないから細野の妻に見せつけて来いつて。だから今日は訪ねたのよと云つて」

「屹度金持ちになつたのねえ……つて驚いてよ」

「嬉しいかないかい？」

「オホッ」

「何んだ故意とらしい」

「良人の喜びの時は妻も共に喜び、悲しみの時は」

「判つた、もういゝ、澤山だ、行つて来い」

妻は仕度を始めて、程なく終つた。

「いゝ具合に箆めて下さいな」

とグイと白い手を差伸べた。

「この邊か」

「も一寸下よ、……えゝ、其處でいゝわ」

「貴婦人見たいだな」

「だつて袖を斯うすると隠れて了つてよ。ねえら。電車に乗つて何うして見せりやいゝか知ら、山手線だから貴方見たいなブラ下から

なくつても空席がどつさりよ、……ま行つて来るわ、途中で盲く考へませう。では左様なら』

『オイ、一、一寸待て。それを落したら離縁だぞ』

『いやアよ』

『いゝや成らぬ、何んだと思ふ金時計ぢやないか』

『其麼に仰しやると心配で歩けやしないわ』

『まア行けッ』

妻はなんだか不安の裡にも、初めて金時計を腕に簞めたと云ふ謂れの誇を頬に浮べて出て行く。己れは何時になくこくしながら見送つた。

それから三時間も経つたらう、妻はイン／＼して戻つて来た。

『オイどうした？』

と己れは何より先きに斯う尋ねた。

『まア悠つくりしてからにませう』

と妻は馬鹿に落着拂つて晴着を脱ぎかける。

『早く云はないかッ』

と己れは此の際怒り顔を見せて妻をして畏服せしめ、同時に早く口を切らさうと試みた。

『其麼恐い聲を出さなくつたつて』

と大に良人の暴威に不服を唱へ、一轉、ニツとして語り出した。

先づ山手電車に乗って彼女は型の如く坐つた。案の上何うしても金時計が袖の下に隠れて齒搔ゆくて仕方がない。え、ッ自烈體、どうかして總てをアツとさせて見せたいと焦り、思ひ切て一絲亂れぬ髪を故意と硝子窓にコツン／＼させて壊し、オヤと俄かに氣が附いた風をして、スーツと手を高く伸べて髪の後に挿んであるクシを取つて素知らぬ體で梳けづつた。その時今まで隠れてゐた金時計は袖からまくられて宙天高くピカツピカツ、總ての乗客はその咄嗟競馬ぢやないが、アレヨ／＼とばかり。

『彼廢氣持ちのいゝことつて無かつたわ』  
女は女で旨い智慧を出すものだと言己れは感じ入つて了つた。

『細野さんの奥様の吃驚つて無いことよ。アラ、何うして、いつ、の連發よ、そしてあたしに一寸貸て頂戴と云つて自分で箆めて見て、まあいゝこと！と賞め稱へてよ、それからがですよ、あたしに奥様貴婦は何を拵へて貰つたの？と訊くんですよ。貴方、あたしに何を拵へて下さいましたか』

『ム、ム』

「ム、ぢやないことよ、細野さんの奥様ね、斯う云つてましたわ、西川さんて奥様に慘酷だわ、奥様も奥様優しい顔して被居るから駄目よ、ツンとして少しも御馳走を拵へて上ないで意地目なさい、今度西川さんが遊びに被居つたらあたしからもウンと云つて上げてよ

女は女の味方ですものねえ、と云つて下すつたわ、あたしだから細野さんの奥様が大好きなのよ』

『入智慧されて来たな、さうして?』

『それから細野さんがおかへりになつたら西川が金時計を買つたことを貴婦が証明して下さいと頼んで来てよ。さうして若しお暇があつたら今晚でも拜観にゐらつしやる様にと云ひ残して来ました、氣が利いてるでせう、オーマイハートと云つて頂戴』

『オーマイハート』

今度は又妻は歸り途の電車の中の出来事を話した。

彼女は又乗つた、恰度自分がしめた坐席の隣りに、きらびやかに装

ふた美人が坐つてゐた。所がその婦人は金の腕巻を付けてゐて、黙つて見てゐると其の婦人は、さも彼女を蔑むが如く見えよがしに其れをピカつかせた。そこで彼女はおのれ貴婦が其度量見ならあたしだつてへん何んの金時計の競べつこなら僅つた一昨日買った許りの新調もの、之は如何でござんすと許り、今度は前例の梳づるなど、手ぬるい手段に出でず、思ひ切つてサツと捲くつて見せつけた。美人は『オヤ』と云ふ表情の下に繁々と彼女を穴のあく様に見つめ、身分のある方の御婦人さまとは露知らずと云ふ風情で、俄かにツンと濟ましてゐたのを恥入つて小さくなつて坐席を擴げて呉れましたわ。あゝ之と云ふも皆金時計の爲め、貴方此の榮ある時計、あたし

等が行手に光りを與ふる金の時計の爲めに讚美しませう』

『よーしいゝか、それでは、己れと一緒に聲を合はすんだよ。いゝか、ワン、ツー、スリー』

『フレイフレイ金どけエー』

『フレイフレイ金どけエー』

『ねえ増枝』

『え？』

『此の時計は静子(當年一歳)が嫁入りする時鎖丈け代へてお嫁の唯一の仕度にしやうや』

『二十歳で嫁るとして二十年後よ、大丈夫か知ら』

『大丈夫さ、裸八兵衛で遣つても金時計持參と云や肩身が廣いぢやないか』

夫婦當さに斯くの如く決定。娘ごうちや嬉しがる。

『貴方』

『ウ？』

『折角買ったんだから皆さんに吹聴して上げなさいな今日は金時計祭よ』

『よし、ハガキが澤山あるか』『あつてよ』

『では』と云ひながら、片ツ端から左の如く書きなぐる。

拜啓陳れば金時計買った。

飛んだ道連れ

己れは至つて品行方正な顔をしてゐるけれど、裏では密つそり味な事をやつてゐる。それを愛妻儀ちつとも知らぬ、だから己れは女と云ふものは「お前に限るぞよ」と云つてさへおけば天下自分より以外に女と云ふものはゐない様に心得てゐる、お目出度いものだ。之でもチャンと新橋にお安からぬのが侍べるのだ、妻に知れたら大變だと思つてゐるから己れは口癖の様に「藝者は大嫌ひだ、殊に新橋の藝者と來たらゾツとする」と身震ひする様な風をして裏でベロリと長い舌を出してゐる、昔しは其麼男ではなかつたけど、近頃己れは漸次精神が悪くなつて來た。

藝者を貶したり又は他の女を貶したりすると妻は獨りで喜んでゐる

る。他を賞め稱やかした時一度でもいゝ顔を見せた事がない、貶せば貶す程悦に入つてゐる。矢張りあたしより女は他にないものだと思ひ込んでゐる、だから己れは旨々その隙を窺つて飛び出したんだ。己れと仲よしの藝者が或る日『あたし一度でもいゝから箱根に行きたいわ、ねえ連れて行つて下さらない？』

と云ひつゝ、ポンと己れの小膝を叩いた、好きな藝者が然うしてくれたんだから己れは嬉しさにオホツと喜んで、自分を忘れて、

『ちや明日行かうか』

と威勢ぶりのいゝ返事を與へた。すると藝者は此の男存外感應が早いわねえと思はず乗り出して、

『え？ほんと？』

とニツとして、しげく顔を見入つたかと思ふと、

『御戯談でせう』

と俄かに手を引いた。その時己れは藝者が己れの日焼けた洋服を見て、此麼貧乏くさい洋服を來てゐて遊ぶ金なんて持つてゐるもんかと思つたんぢやないかとハラ／＼した、そこで幸ひ己れはその時多くの持合せがあつたから、獨言の様に、

『まてよ』

と云ひつゝ、グイとポケットの中へ右手を差込み、財布を引張り出したながら、

「これだけしか無いんだ、足らなきや中止だ」

と大きく出て、その財布をポーンと藝者に渡した、藝者は一枚二枚と数へて見て、

「此麼にあつたら充分よ、ねえ行きませう、さア酌ぎませう、綺麗にあけて頂戴よ、ねえ行きませうよ」

と、再び御戯談でせうと云はなかつた。己れは其の時財布をポーンと投げ出した所が如何にも男らしい氣前のいゝ所だ、斯うしなぐちや男は女に持てないんだいと自分ながら自分のした處置の如何にも當を得たのに感じ入つて了つた。淡泊した氣質で男前がよくてと思つてくれたか知ら、いや確かに思つてくれたらうなアと己れは

ヂツと藝者の顔を見据ゑた。すると藝者は頓狂な聲を出して、

『いやアーよ、妾の顔はアイヌの顔ぢやあるまいし其麼に珍らしいものぢやありませんよ』

なんと云ふ張合のない返事だらう、何故氣前のサラリとした所ころりとして呉れないんだい。コラ。

そこで己れは更に己れと云ふ人間は飽く迄も江戸ツ子氣分の満ちた男だ、澤山の客の中に此麼のがゐるかい、惚れるなら憚りながら此のお方だよと思はせる爲めに、

『そのおあしはお前預かつておいてくれ、悉皆お前に任せるから』  
と破天荒に出た、すると藝者は、



『さう、困るわねえ妾し』

と云ひながら、眉と眼のあたりへ微かに『これで安心した』と云ふ閃めきを見せながら、表面ではさもく仕様事なしと云ふ鹽梅を見せた、ヘン手だぞ、手だぞ。

それから藝者は決して己れを喜ばす様なことを云つたり、故意と睨む眞似したり、膝を抓つたり、ねえ貴方と崩れかゝる様な事をしなかつた、普通の客に對すると同じく此の大事の己れを待遇つた。なんと悶へてももうお金は此方にあるからめめたもの、敢て機嫌なにか取る必要が何處にありんすと云ふ顔付、酒も碌々酌なかつた。その時初めて己れはサア失策つたと氣が附いた。殆んど二ヶ月骨

と血を絞つて得たその金を什麼に妻も己れも期待してゐたのかも知れぬ、それを此麼藝者風情の爲めに二晩三晩の感興を共にしたのみで捨て、了ふのかと急に顔を曇らした、同時に悉皆氣が滅入つて、喜怒哀樂を顔に出すまいと始終修養してゐたけれど、斯うなると何んにもならぬ、己れは快々としてフウ〜太息を續けた。

『貴方どうなすつたの？』

藝者は心配相に己れの顔を覗き込む。

『イヤなに、別に……』

『お酒が足りないのだわ、熱いのを取り寄せませう』

と勝手に定め込んで、ボン〜手を叩き、お銚子を新たに命じた。

己れはそれを見て益々悶へ苦んだ、現に自分の前にはまだ少つとも手を付けぬお銚子があるぢやないか、なんと云ふ勿體ない事をするんだい。家にあつてはボン／＼と銚子の底を叩いて一滴二滴と落つるしづくを大事相に嘗める様にしてゐるんだよ、其麼にビク／＼ハラ／＼させるもんぢやないよ、今月は二度の散髪を一度に我慢してまで儉約を重んじてゐるんだよ、それだに、それだに、あゝ。取つたものは残すも惜しいもう破れかぶれた、さア注いだ注いだ。

己れは煽る様に呑み續けた、酔が次第に廻はつて來た。

ヘン何を吝々するんだい、好きな女に好きな酒を注いで貰ふなんで命冥加な男さ、ウイー妻がなんだい、たとへ路傍に迷はふと……

どつこい、口を注意せにや不可／＼アーン、ねえ花香さん己れの家は立派なんだよ、假令己れは幾程お前が下から銚子を一本餘計に貰つたつて悲觀するものか、一しづくや二しづく嘗める男とは男が違つてらア、ウイー。

『明日は箱根だよ、汽車は三、三、三等だよ』

『三等なんか乗れるもンですか』

酔つて居ながらもこりや拙手な事を云つたのだと氣が附いたので慌て、

『一、一等だよ、此の己れはナ、此の己れは何時も一等だよ』

『さう？』

此のさう？は嘘附けのさうである。こいつア化の皮を現はされたかと思つたから、己れは急に、へ、レケを装ふて、

「己りや酒に酔つてゐるから何を云つてゐるか判らんよ。どうぞ悪しからず」

『どういたしまして……さアもうお歸りなさいな、遅くなると奥様に叱られますよ、自働車を呼びませうか』

『なにッ自働車!!』己れは酔がピタツと醒めた。身代がつぶれる様なこと許り連發するものぢや無いよ。

『さうだなア自働車で歸らうか知ら』

と故意と小首を捻つて見せて、ハタと氣が附いた風をして、手を

左右に振つて、

「不可ない、不可ない、己れはブラ〜歩いて歸へるよ、さうすりや悉皆醒めて酒の香ひも取れて家へ歸る時分普通と少つとも變らなから却つて其の方がいゝんだ」

「成程それも然うだわねえ」

と藝者は全く本當にして了つた。己れはシテやつたりと許り、出るが早いかヒラリと電車に飛乗つて、

「財産保護政策が旨いだらうへん」

翌朝になつて、己れみたいな寢坊でも早く眼醒めた、引力が丈なす黒髪だからだらう。十時出發と定めてあつたのに係はらず己れは

八時頃に東京ステーションへ行つた、そしてヂツと彼女を待たなかつた、なかくやつた來ない時間は切迫する、來ないんぢやないかと難かしい顔の表情を作つたけれど、豈夫金まで渡してあるんだからと己れは思つた、然し待てよ何分藝者だもの何處都合で出られないかも知れぬと思つても見た。

若し來なかつたら何うしようか知ら、己れは急用が出來たので京都まで至急行かなくちやならぬと旨々と妻を一杯喰はして、急ぐのでもないに、さもアタフタと旅装をとゝのへて家を出て來たんだ、懐にはピタ一文なし、急用が俄かに濟んだぢやなし、ハテ苦勞の種が湧いた哩、何を愚圖々々してゐるんだらうと己れはグイと伸び上

がつた、見えない。

時計を見れば僅か十分、乗客はそろそろ出始める。

「オヤ西川君ぢやないか」

と肩を叩かれて吃驚、

「ど、ど、誰方です、あツこれはく竹山先生ですか、久濶ですなえ、相變らず御壯健で」

と、ニコリとして見せたが、厭な所で出會したものと一寸空をむく。

「孰方へ？」

「箱根まで」